THE STATE OF THE S

獨協医科大学精神神経医学教室 同門会誌



第1号 **2009**

目 次

1.	同門会・会長 ご挨拶	黒田	仁一	先生	1		
2.	特別寄稿 栃木県精神衛生協会	青木	公平	会長	2		
3.	下野の国に来て6年…	下田	和孝	主任教授	4		
4.	随想	大森	健一	名誉教授	5		
5.	同門会会員よりの寄稿				6		
	精神生物学講座	秋山	一文	主任教授			
	大平下病院	藤沼	仁至	理事長			
	朝日病院	朝日	晴彦	理事長			
	鹿沼病院	駒橋	徹	理事長			
	氏家病院	松村	茂	院長			
	佐藤病院	佐藤	勇人	理事長			
	室井病院	室井	秀太	副院長			
6.	研究室便り						
	ゲノム精神薬理学グループ	IJ	支邊 爿	关 先生	13		
7.	教室便り				14		
	人事往来						
	現在の教室スタッフ						
尾関祐二准教授 着任のあいさつ							
	新入医局員 挨拶						
	写真で見る教室の動き						
8.	研究業績				21		
9	編集後記				42		

同門会誌の発刊に寄せて

栃木県立岡本台病院 獨協医科大学精神神経科同門会会長 黒 田 仁 一

このほど現医局員のみなさんのお力を得て、同門会誌が定期的に刊行されることになり、感慨に耐えません。平成15年、同門会が発足した頃の医局の状態を考えますと隔世の感があります。当時を振り返りますと、医局員が大量に辞めてしまい、日常の診療もままならない状態でした。我々、市中の精神科病院にとっては、医師の供給や、合併症を持った患者さんの依頼など、多くを大学の医局に負っています。泥縄の感はありましたが、同門同士の交流を深めるとともに、医局の再建と安定した発展のため、微力ながら貢献できればと同門会を立ち上げたしだいです。幸いその後、下田現教授や残った医局員の尽力などにより、医局員も順調に増え、研究活動も活発になってきていると聞いております。これを期にしばらく休眠状態であった「宮坂賞」も復活することになりました。若い医局員の励みになればと期待しております。

獨協医大精神科も誕生して35年を過ぎました。現在名簿で確認できる同門会員は約60名に達しています。しかし年一回行われる総会にはかなり限られた会員しか参加していないのが実情です。会員のみなさんもお忙しいと思いますし、遠方の方もいらっしゃいますので大変かとは思いますが、ぜひ参加をお待ちしております。OBと現医局員の交流を図るため、昨年より総会は医局の忘年会の前に行うことにし、今年からは総会のあと講演会を行うことにいたしました。ちなみに今年は、初代助教授の小田 晋先生をお招きし、医局創生の頃や宮坂先生の思い出を語っていただく予定です。こういった活動や、「宮坂賞」への援助のため活動資金が必要となります。このため会費を今年から銀行口座引き落としにさせていただきます。なにとぞご協力をお願いします。

最後に、本誌が会員同士の交流の場として、医局の動向を知る縁として魅力あるものに育っていくことを祈念してご挨拶に代えたいと思います。

─ 特 別 寄 稿 ──

獨協医科大学精神神経医学教室同門会誌発行に寄せて

財団法人栃木県精神衛生協会 会長 青 木 公 平

この度、獨協医科大学精神神経医学教室同門会誌初刊の発行にあたり財団法人栃木県精神衛生協会を代表しまして、心よりお喜び申し上げます。

自治医科大学に続き、獨協医科大学が昭和48年に、当時1,653,000の人口だった本県に開学し、 翌年には、精神神経医学教室が創設され、地方には、めずらしく二つの医大ができました。

そして、教室の初代教授には、故宮坂松衛先生がご就任され、東京医科歯科大学より共に赴任された、大森健一先生をはじめとする5名の先生方との小さな所帯でのスタートだったと記憶しております。

宮坂先生は、就任間もなくから、教室の先生方と共に、新設医大に課せられた医学教育と医師 育成を着実に推し進め、その研究と臨床の仁術を教え受け育った精神科医は、多数にのぼり、本 県をはじめ全国各地において、ご活躍されていることは言うまでもありません。

私ども精神衛生協会は、現在、民間精神科病院21、県立精神科病院、4つの総合病院精神科、そして、獨協・自治両大学を合わせた28病院の会員編成で、計5,315の精神科許可病床数を有し、行政や関係団体等と密に連携を取りながら、地域精神科医療はもとより、障がい者の社会復帰並びに社会参加の促進に努めているところです。

そして、この会員のうち、5つの病院においては、宮坂、大森両先生の教示を拝受された獨協 医科大学出身の俊秀な方々が病院長をつとめており、本会の運営や事業活動等にも積極的に協力 をいただいているところです。

私は、都内の大学出身ですが、獨協医科大学精神神経医学教室の野球部の噂は、よく聞いておりました。教室創設3年目に野球部を創部されたそうで関東大学精神神経科大会にも早速、出場し、3位になるなど、「強さは本物」であり、「研究・臨床・スポーツの三ツ星教室」という印象がありました。

年月の経過とともに、教室員も増えはじめ、2代目の教授の大森健一先生の時代には、更に活気づき、栃木県より、老人性認知症疾患センターの認可を受けられるなど、神経内科教室と共に、 学内外連携を図りながら体制を整えられ、認知症専門医療相談等の領域においても、地域に貢献しているところです。

また、平成13年に、3代目教授となられた秋山一文先生におかれましては、専門的な研究の権威として、学生と教室医局員に対し、熱心に教育指導に取り組まれました。

岡山県から赴任された秋山先生と私が初めて、お会いしたのは、ご就任間もなくに、大学に挨拶に伺った時でしたが、研究者としては若々しく、それまで発表された論文を拝読しても、前提から結論に至るまでが、実に綿密に編組されており、論理的かつ説得力に富むものばかりで、慰を感じたことを思い出しました。

秋山先生は、獨協医科大学の更なる専門的研究のため、現在、精神衛生学講座の初代教授として、ご活躍されておりますが、精神神経医学教室は、滋賀医大より助教授として赴任されておられた下田和孝先生が、平成19年に主任教授にご就任され、「研究・臨床・スポーツの三ツ星教室」の伝統を着実に受け継ぎながら、加えて、県民のこころの健康づくり支援や災害時医療支援などの幅広い活動にも、精力的に取り組まれており、改めて、心より敬意を表するものであります。

特に、毎年秋には、県民を対象とした認知症に関する講演会を企画、実施されることや平成16年の新潟中越地震に際しては、被災者の「こころのケア」の必要性をいち早く認識し、大学病院長と本会に対し、栃木の精神科医療チーム派遣を要請するなど、卓越した判断力と俊敏な行動力をもっておられます。

被災者ケア対策については、下田先生のご尽力により、本会と獨協医科大学合同による「こころのケア栃木医療チーム」を直ちに編成することとなり、4日間にわたる現地避難所等においての支援活動をすることができました。

この災害支援活動の様子は、本県の新聞などにも取り上げられましたがこの活動を契機に、本会は、災害時における被災者のこころのケア対策に会員一同一丸となって尽瘁する意を確認するとともに、活動の目的に加えることといたしました。

ここ近年の医師不足問題など、「医療の冬の時代」は、まだまだ続くと思われますが、栃木に 赴任早々から、教室員増加のために全国を奔走したり、多忙にも関らず、学生と頻繁に肩を並べ て飲み語り合うなど、色々な努力をされている、エネルギッシュな下田先生には、これからも更 に期待してしまいます。

このように、教室創設以来、歴代4名の教授が軸となり、それぞれの時代に教室員と共に、外来、病棟、教室の運営にご努力されてこられましたが、これからも、同門会の先生方と円滑な連繋と協調を保たれ、繁栄の歴史のページが積まれますことを願い、皆々様の益々のご活躍を心よりお祈りいたしております。

下野の国に来て6年…

獨協医科大学精神神経医学教室 主任教授 下 田 和 孝

近江の国、滋賀医科大学精神科から獨協医科大学精神神経医学教室に赴任したのが、2003年1月であるから、下野の国に来て6年目になる。

私のモットーは「地域の習慣を知り、地域に溶け込む」ということである。米国・ノースカロライナ大学精神科留学中は catfish nugget (なまずの唐揚げ) が好物であったし、瑞国・カロリンスカ研究所臨床薬理学教室留学中は surströmming (強烈な匂いのニシンの缶詰) をaquavitでトライした。

最初の頃はナビがなければ、JR宇都宮駅、東武デパートなど、どこにも行けなかったが、この頃は行きつけのレストランや飲み屋も何軒かできたし、患者さんの住所をきけば「あのあたりだな」というのもわかってきた。最初は違和感のあった東日本の醤油にもなれた。下野の国は蕎麦が大変うまいことを知り、蕎麦屋めぐりもしている。また、「"栃木県民の歌"(歌っているダ・カーポの榊原広子さんは栃木県佐野市出身)がなんでカラオケに入ってないねん!」と言ってはスナックのママさんを困らせてもいる。

精神科の診療に言葉は重要である。栃木の言葉を知ろうと患者さんやご家族、病院のスタッフから色々教えてもらった。「先生ノ、今度ノ、白内障でノ、眼科にノ、ニュウエンすることになったんだよぉノ」と言われても、「ええっ?、入園??」などと困惑せず、「そうか、そりゃ大変やなあ、で、いつ入院すんの?」と切り返せるようになった。栃木でいうところの「こわいんだァノ~」の意味もほぼ掴めたし、「先生、外来の予約?、来月の〇〇日にしてくれっかな?9時半でだいじかな」と患者さんにいわれても「だいじだよノ」と言えるようになった。

しかし、これは「栃木では「イ」を「エ」と発音することがある」という法則から「ニュウエン→ニュウイン→入院」とか「だいじ→大丈夫」という変換機能が小生の脳にインストールされたに過ぎず、発音を会得するのは容易ならざることと認識していた。

小生は神戸生まれ、高校卒業まで岡山で過ごした後、1年間大阪府豊中市で予備校通いを余儀なくされた。その後は1977年に滋賀医科大学入学以来、留学期間を除いた約23年を滋賀で過ごした根っからのguy from western part of Japanである。岡山から来られた秋山一文先生とお話しさせていただく時は、いつの間にか岡山DNAが騒ぎ「そげ~なことではおえませんが~(「そういうことでは、いけませんよねえ」の意)」と岡山弁になるが、やはり、小生のnative languageは関西弁だと思っていた。少々のことでは、関西弁のイントネーションが変わるはずがないと信じていた。

しかし、最近、何かの拍子に無意識に栃木弁のイントネーションになっていることがあるのに 気がついた。スタッフに「今、俺、栃木弁やったんとちがう?」と尋ねることがしばしば起こっ ている。結局、漬物の味がしみ込むが如く、発音機能が脳にゆっくり時間をかけてインストール されているのである。その機能が熟成し、夢のなかでも栃木弁でしゃべるようになるのに、あと 何年くらいかかるだろう。その時には正真正銘、「栃木県、我らの~、我らのふるさと~」」に なっているだろう。

1) 栃木県民の歌(作詞:岡きよし、作曲:川島 博、補作:栃木県章・県民の歌選定委員会、

歌:ダ・カーポ) http://www.pref.tochigi.jp/intro/tochigiken/hakken/aramashi6 index.html

随想

医療法人社団 至誠会 滝澤病院 理事長 獨協医科大学名誉教授 大森 健 一

時は過ぎ行く・・・されど我等が日々

同門会誌の原稿を依頼され、すでに過ぎ去った昔に思いをはせたとき、時の流れの速さに改めて愕然とした。獨協医科大学の開学は昭和48年、次の年49年の4月に精神医学教室の開講に伴い、私は5人の仲間とともに東京医科歯科大学から転勤した。その5人とは宮坂、小田、中野、東本の諸先生、そして私であり、数ヵ月後に大高先生も合流された。

大学病院が開院し、患者さんが受診するようになったのは我々が赴任して3ヵ月後の7月中旬であった。なにせ開院当初のことであり、病棟も一部だけが使用され、精神科病床もアレ内、神経内科も利用しており、我々の居室も未使用の病棟が使われる有様であった。精神科医は6人であり、当直はしょっちゅう、遠距離通勤なのでウイークデイも毎日のように研究室、当直室で寝起きするのが3人という具合であった。

しかし新しい医科大学、新しい精神科教室を立ち上げるということで、一致協力、意気に燃え、 そのような生活も一向に苦労とは、感じなかった。

夜遅くまでメンバーが一緒にいると、当然酒になる。症例検討といえば格好がいいが、喧々 諤々、酔って騒ぐことが毎日のようであった。寝もやらず話し続け、飲み続け、ふと気がつくと、 夜は白々と明け初め、何処からか郭公の鳴き声が聞こえて、慌ててベットにもぐりこむという具 合であった。考えれば乱暴な生活であったが、そこで得られる先輩からの精神障害の知識、診療 のあり方、著名な先生の勉強振りとさまざまなエピソードなどなど、実に生きた学習であり、そ の後の私のおおきな支え、財産となった。

また、開学数年の間は、医師の数も少なく、それゆえ、各科の医師たちとの交流も濃厚で、神経内科の先生の誕生パーティに勝手に押しかけ、料理や酒を強奪したり、あるいは整形外科の医局に飲みに行ったりと、よく言えば家族的交流があった。また当時は学生も医局によく遊びにきた。「先生、おでんを作りました」など言いながら数人でやってきて、遅くまで酒盛りとなる。翌日掃除のおばさんに「この部屋、酒くさいですよ、あらこんなにビン」など笑われる始末であった。この交流は、当時の学生たちは今は開業したり、病院の院長をしたりと、大活躍中であるが、時に会うと昔を思い出しては語り合う、「友情」となって、今も続いている。

その後、教室には森先生、高江洲先生などが加わり、次第にさらににぎやかになった。

そして、30数年があっという間に過ぎ去って、今日に至るわけである。第1回生の黒田、斉藤、藤沼らの諸先生もすでに50代、まさに光陰矢のごとし、月日の経つのは早いものである。でも、あの頃の経験は、私の中に昨日のことのように息づいて、現在の私を支えてくれているのをしみじみと感じる。

獨協医科大学精神神経医学教室同門会誌に寄せて

獨協医科大学精神生物学講座 主任教授 秋 山 一 文

私は平成13年2月から平成19年3月まで獨協医科大学精神神経医学教室に教授(以下、精神科教授)として務めさせていただきました。平成19年4月からは新設された精神生物学講座の主任教授を務めさせていただいております。個人的には栃木県という環境に慣れるのに幾ばくかの時間を要しましたが、獨協医科大学には仕事がしやすい環境が整っており、着任してから多くの人たちと出会う幸運に恵まれたことは本当に幸いであったと思っております。

しかしながら、精神科教授在任中は正直を言いまして平坦な道のりではありませんでした。大森健一先生が平成12年4月から学長に就任され、精神科の教室では私の着任まで教授不在が続いていました。しかし、平成13年2月の着任当時で教室員は20名近くを数え、地域に根ざした精神医療を着実に実行していました。6月には教授就任祝賀会も開いていただき、私の恩師である岡山大学名誉教授大月三郎先生と黒田重利教授に出席していただき、学内を案内したのが思い出として残っています。

私も日々の診療、講義の準備、教授会、各種委員会などに忙殺されるなかで、集会室として使われていた一室を少しずつ研究室として使えるように整備していきました。また、栃木県の精神 医療関係者の方々とも各種の研究会で知り合うことができました。

平成14年4月から、助教授が空席となり、適任の人材を探していたのですが、同年、大宮市で開催された日本生物学的精神医学会からの帰り道で、高橋三郎先生(埼玉江南病院院長)と交わした偶然の立ち話がきっかけになり、平成15年1月には滋賀医科大学から現精神科主任教授の下田和孝先生を助教授として迎えることができました。しかし、私の不手際も手伝って、同年4月から医局の医師の数が大幅に減る事態となり、残っていたのは私、下田和孝先生、仲谷 誠先生、惠 武人先生、渡邊 崇先生だけになりました。当直要員にも事欠くようになり、私自身、平成15年度から17年度までの3年間に当直をしました。多いときには土日月の3連直をこなし、夜間対応のイロハを学びました。東大の加藤進昌教授に頼んで、6月から7名の、また岡山大学から1名の先生が応援に来てくれました。応援していただいたこれらの先生方は現在、在籍しておられませんが、当時我々を支えてくれた仲間と思っています。その後、別項に記載されていますように、医局員の数も徐々に回復していきました。

平成19年4月に私と齋藤 淳は精神生物学講座へ異動となりました。講座の位置は基礎棟1階で、実験室はDNA専用、RNA専用、培養室の3室をそろえていただきました。最近、基礎研究と臨床研究の融合という意味で、トランスレーショナルリサーチということばが強調されています。もともと癌研究の分野で提唱された概念ですが、精神障害の生物学的研究も今後はそのような方向で展開していくでしょう。私ども精神生物学講座に於いても、この方向で研究を行っていく所存ですが、対象疾患は統合失調症とその近縁に絞っています。進行中の研究は、認知機能と脆弱性遺伝子との関係、稀な遺伝性疾患に合併した統合失調症症例にヒントを得た遺伝子解析、関連した遺伝子のクローニング、薬物依存の基礎的研究です。ヒトゲノムだけでなく、細胞も扱っており、トランスレーショナルリサーチという目標に恥じない研究を目指します。また、PETセンター、小児科の先生とも共同で脳内ベンゾジアゼピンレセプターの臨床的応用を目指します。

教育に於きましては、行動の科学(1年生)、精神生物学(2年生)を担当しています。これらの科目が4年生で習う精神医学の理解に少しでも役立てば幸いです。外来診療については秋山、齋藤とも1枠を続けることが許可されていますので、同門の先生方には今後ともお世話になります。

稿を終えるにあたり、獨協医科大学精神神経医学教室の益々の御発展を心より祈念いたします。

酒と学問(?)の日々

医療法人社団 栄仁会 大平下病院 理事長・院長藤 沼 仁 至

同門会誌発行おめでとうございます。思い返せば私が入局して早1/4世紀が過ぎました。当時の医局は、素晴らしいスタッフを擁した居心地の良いものだったと懐かしく思い出されます。先輩方に学問的な薫陶いただいたにもかかわらず、医者としては「洟垂れ小僧」のままで、年齢だけは経過してしまいました。

ただ、アルコールについては、お好きな先生方が多く、楽しい飲み方をされておられたので、今でも、そのお教えを守るべく努力しております。そう言えば、入局して最初に命じられたのは、他科の医局を廻ってウィスキーを調達することだったように思います。まあ、一応は借用することにはなっていましたが、返しに行ったことは勿論ありません。時代も飲酒に寛容であって、関湊初代理事長は年末の納会、年始会などには必ず四斗樽をご用意していらっしゃいました。他科の先生も昼間から酔うほどはお召し上がりにはなりませんから、精神科の医局員としては、これ幸いと樽を医局に持ち運ぶのが習わしでした。これも多少のコツがあって、まずはやかんなどにある程度の量を移し、樽を軽くしないと台車に乗せられないのです。また、医局に運び入れても、できるだけ早く空けないと樽の香が強くなりすぎ辟易するようになってしまいました。

他にも楽しい思い出の尽きない医局でしたが、こういう話をするということ自体老いたという ことなのでしょう。

獨協医大精神神経科時代の思い出

医療法人朝日会 朝日病院 理事長 朝 日 晴 彦

私が獨協医大に入学したのが昭和52年で、野球だけに賭けたような6年間を過ごして58年に卒業。5月に精神神経科に入局した。それに先立ち4月に宮坂教授にご挨拶に伺うと、なぜか5月連休明けから出勤するようにとのことで、国試に落ちていたら格好悪いなあと思いながら発表前から出勤となった。当時は宮坂教授、大高、大森助教授、中野、東本、森講師に、助手には入江、黒田、斉藤、藤沼、高田先生で、心理に高良先生。研修医には1年先輩に吉田、川島先生、そして同期に富山、石塚、私というスタッフだった。私達3人が入局し研修医が5人になったこともあってか、大高先生の臨床脳波の個別指導や大森先生の病理関係の読書会などの勉強会があり、今考えると非常に贅沢な研修医時代であったと思う。春秋の各種学会や生理、病理の夏の勉強会にも誘っていただいて楽しい雰囲気を味わえた。

精神科といえば「酒」と「野球」という時代で、夕方6時過ぎると待ちかねたように医局での酒盛りが始まった。御用達の酒屋にビールを1ケース頼むとほぼ2日で無くなった。そこでまた注文するわけだがすぐに飲みたい。だから必ず冷えたビールを数本入れていますぐ配達してほしいとなった。医局の冷蔵庫はビールを冷やすために存在した。患者さんからいただいたビール券やアルコール類はすぐになくなった。お中元で大量にストックされるがお歳暮まで持たなかった。私がいただいたサントリーレッドエクストラサイズ2本もこれはさすがに誰も手を出さないだろうと思っていたらいつの間にか消えてなくなっていた。宮坂先生はどちらかというとウイスキー派であった。冷凍庫の中のいつ作ったかわからないような氷をグラスに入れウイスキーをドボドボと注ぎ水道水を入れて御自分の指でかき混ぜて水割りを作っていた。氷がないとただ水で割っただけの生ぬるいものでも平気であった。これでも「酒」に関しては昔に比べれば穏やかになった方だと諸先輩方からは聞かされていた。

もうひとつの「野球」は、当時医者といえばゴルフという時代だったが、精神科はなぜか「野球」。関東大学精神科野球大会が毎秋行われていたが、明らかに日常業務より皆真剣であった。夕方になるとグランドで熱心に練習をした。私の入局時は、森玄房先生がエースで私が捕手、内野は大森、東本、中野、奥谷先生、外野は森克己、斉藤、高良先生であった。森先生の投球は元ヤクルトの高津のような緩いシンカーが中心で右打者の内角にいやらしく鋭く落ちた。相手は強振して空振り三振や内野ゴロの山を築いた。大会は私が入局してから3年連続で優勝し、持ち回りの優勝カップを永久保持とした。その後、駒橋徹、松村、佐藤、朝日公彦、駒橋理司などの若手の先生が入局し、さらにもう1度3年連続で優勝し、獨協精神科野球は黄金時代を迎えた。特に駒橋理司先生がクローザーとなった数年間が最強であったと思う。その後も何回も優勝したが、優勝すると宮坂先生が喜ぶのでそれがまた嬉しかった。結局は入局後も真剣勝負の野球とは縁の切れない生活であったが、それはとても幸せな時を過ごせたのだと今感じている。平成6年に獨協を辞して朝日病院に移り15年になりますが、獨協時代のことはまだつい最近のことのように感じています。

医局の思い出

特定医療法人清和会 鹿沼病院 理事長·院長 駒 橋 徹

私は昭和61年5月に、清水輝彦・諏訪浩先生とともに獨協医科大学精神神経科医局へ入局し、約12年間お世話になり、平成10年3月に辞して父の経営する鹿沼病院へ就職しました。その約12年の間、1年間は福島県郡山市の針生ヶ丘病院へ、2年間はカナダ、バンクーバーにあるブリティッシュ・コロンビア大学精神科へ派遣して頂き、それぞれの場所で貴重な経験をしました。

私が入局した昭和61年は、宮坂松衛教授のもと、大森健一助教授、大高忠助教授、中野隆史講師、東本務講師がいらっしゃいました。1年先には大垣(小柳)悠子先生、1年後には、朝日公彦・小柳賢治・佐藤勇人・松村茂先生が入局され、研修医が多くにぎやかな時期でした。

医局ではいろいろなことを経験しましたが、特に印象に残っていることを書いてみます。

臨床面では、患者さんの声をしっかりと受け止めること、話をしてくれない患者さんにはじっくりと寄り添い何とか会話を引き出すことを学びました。無言の患者さんに朝から就寝までつきあったことや、てんかん発作を見逃さないように一日中患者さんにはりついていたことなどは大変だったものの懐かしい思い出です。てんかん発作が起こった時、脳波検査の予約をするのではなく、すぐ自分で脳波をとり判読することは繰り返し指導を受けました。

研究面では、大森助教授を中心に行なった、大平町と栃木県全体の高齢者を対象とした認知症やうつ状態の有病率調査に参加し、そのデータのまとめ役を務めました。調査では、保健師さんとともに対象者の家を一軒一軒訪問し、問診と簡単な打聴診で認知症とうつ状態の診断をしました。家庭では病院の外来とは違った患者さんの側面を見られること、各家庭で診断を下すのは毎回違う環境の中で判断するため、診察室と違って同じ判断基準を保つのが意外に難しいことなどを学びました。

上記の研究成果を発表するため、大森先生、清水先生とドイツのベルリンで開催された国際老年精神医学会へ参加したことは楽しい思い出のひとつです。ベルリンは、東西の壁が取り壊された直後で刻々と東側の景観が西側に近づいていました。学会後にはオーストリアのザルツブルグとイタリアのローマを訪れました。3人でワインを持って電車に乗り込み、飲みながらアルプスを越えザルツブルグからローマへ向かいました。

カナダ在留中には栃木県下の認知症調査のデータの一部をカナダ人高齢者のデータと比較し、 一般に「外国人のうつ病者はよく話をする」と言われていることの裏付けの調査と証明を行い、 それが私の学位論文となりました。

医局での生活は、楽しかったこと、つらかったことなど様々なことがありましたが、今となってはすべてが懐かしい思い出です。現在研修をしている先生方、医局でいろいろなことを学んで良い臨床医や研究者となって下さい。そして、私たちの病院へ常勤として赴任して下さい。その日を楽しみに待っています。

医局四方山話

医療法人誠之会 氏家病院 院長 松 村 茂

私は栃木県央やや北よりに位置するさくら市(旧・氏家町)にある、父の開設した氏家病院に て院長をさせていただいている。

出身大学は獨協医大ではないが、栃木県で生まれ育ったことや、早く地元の地域医療に貢献するべく、大学卒業後の1987年4月から獨協医大精神神経科医局に入局し、91年3月まで在籍させていただいていた。

この医局に入る少し前に、まだ学生気分が抜けずちょっとだけやんちゃだった私は、不法改造した車に乗っていて、鹿沼の高速道路のインターで交通機動隊に捕まったことがある。国家試験の正式な合格発表はまだだったが、答え合わせでは合格を確信していた時期であったと記憶している。支払いが済んで料金所を抜けるや交機のおっちゃんに「なんだかマフラーの音がやけにおっきんじゃねえけ!?ちょっとこっちこぉ!」といわれ屋内に連れて行かれた。不幸なことにその時の服装はパステルカラーのイージーパンツにマドラスチェックのシャツで、どう見てもキチンとした仕事をしているようには見えない格好だった。いろいろと尋問されていると、「ところでなんの仕事してんだぁ?」と問われたので、その時は控えめながらも内心はこう見えても医者になったんだぜ的な感じで、「一応・・医者なんですけど・・」と答えた。するとすかさず「ふーん・・で、どこの石材店なんだ?」だって!?それって『医者』→『石屋』→『石材店』ってか? この出来事がその後医局の先生方の笑い草となった。

入局当時、教授は故・宮坂松衛先生であり、私の結婚の媒酌人にもなっていただき公私ともに大変お世話になった。また、大森・大高両助教授、中野・東本両講師をはじめ諸先輩先生にも、臨床・研究はたまた雑学まで教えて頂き感謝している。皆、概して酒好きで、夕方5時頃には医局からビールの開ける音がしてきて語り合いとなる。いつもそれから精神科医療のコツや裏技的な話が出るので、まだ経験の浅い私たち新米Drは残って話を聞いていたものだった。やんちゃだった私もいつしかそこそこ真面目で従順なDrになっていった!?同門会長の黒田先生!大変お世話になりました。

また、「関東大学精神科野球大会」なるものがあり、私が在局していた頃、我が医局は慶応と共に黄金時代を築いていた。何年もの間、この二大学で優勝争いをしていた。ある年の慶応との決勝戦で私はホームにヘッドスライディングし、1点を先取したがキャッチャーのブロックに遭い負傷した。すぐに球場近くの慶応病院に搬送され、結局右肩亜脱臼であったが、最初に救急でDrに聞かれたことが、なんと!「あのう、家族は何人いるんですか?」って!?家族歴からかよ!これホントの話!また、ある年には中野先生が足の靭帯切ってしまったり、何事にも手抜きせず熱かったなぁ・・あの時代は。

脈絡なく自らの思い出を羅列したが、とにかく同門の先生方にはホントに個性豊かな素晴らしい人間が沢山居るということを知って頂けたら幸いである。万歳!同門会!

同門会誌創刊に寄せて

医療法人社団緑会 佐藤病院 理事長・院長 佐 藤 勇 人

精神神経医学教室の同門会誌創刊、誠におめでとうございます。

日頃から医局と疎遠にしている私の所に、下田教授から寄稿の依頼がありました。正直あまり 真面目な医局生活ではなかった私がそのようなものをお引き受けしていいかどうか悩みました が、いい機会を与えてもらったと考え直し、私なりに医局への感謝とお詫びと期待を込めた文章 を綴らせてもらいました。

私が昭和62年5月に朝日公彦先生、小柳賢時先生、松村茂先生と共に入局しまして、はや22年が過ぎようとしています。入局後の我々の初仕事は、歓迎会も兼ねた他の医局との野球の試合ではなかったかな?最近はエピソード記憶障害のせいか、入局当時のいい思い出ばかりが想い出されます。

確か火曜日の5時半からが野球の練習であり、その後よく飲みに行ってたな?。関東大学精神 科野球大会では我々が入局した年から3連覇を果たし、野球の事では教授に誉められました。

その頃には先の事など考えてはおりませんでしたが、4人とも実家は精神科病院であり、将来的には実家に帰って医者をやっているのかなとおぼろげに思っていました。その思いの通りに4人とも院長となり、地域精神医療に微力ながらも貢献させていただいております。何とかメシの食える医者にして頂けたのは、その当時の宮坂松衛教授はじめやさしい先生方の御指導のおかげだと感謝しております。

宮坂先生は私のような怠け者でも、何とか良い所を見つけ、向いているものに興味がいくように様々な配慮して下さいました。大高先生は、たまにやる気を出す私に夜遅くまで脳波を教えて下さいました。大森先生と中野先生は、未だに不肖の弟子の面倒をみてくれています。

どの先生にも共通したのは、「患者さんを診る」という臨床の視点で医療をしていたということです。宮坂先生から「てんかんの治療は、発作を止めて生活がちゃんとできる事が第一だから。極端に言えば発作波はいくら出ていてもいいんだよ」という指導をうけたことがあります。「生活第一」なんてどこかの政党スローガンにありそうな文言ですが、医療は生活に直結しなければ意味がないわけであり、本質をついていたと思います。

精神科患者と正対する臨床場面において定義やマニュアルが無力になってしまう事は、皆さんも経験している所だと思いますが、当時の私は(外見上はそう見えないと思いますが)、結構演繹的な人間であり定義・意義や手順にこだわるほうであった為に、精神科に魅力を感じられず治療に行き詰まる事が多々ありました。しかし獨協で学んだ「フォームにこだわらなくてもヒットが打てればいい」という臨床重視の姿勢が、その後の私を作ってくれたと信じています。(あの当時に周囲の先生方の気遣いを素直に受け取れず、生意気な言動と態度で迷惑をかけたな~と思い、人を使うような立場になった現在は大変後悔しております。)

医局の中にいると意外とその価値はわからないものだと思いますが、離れてみてそこの偉大さ や得たものの大きさに気づくものですので、現在医局に在籍している先生方には「今」を頑張る ことが未来に繋がると信じてもらいたいです。

今後も、「臨床第一」である獨協の姿勢を堅持しつつ「おおらか」な医局として発展していた だけることを願っております。

獨協医科大学精神神経医学教室同門会誌発刊によせて

医療法人大田原厚生会 室井病院 副院長 室 井 秀 太

精神神経医学教室同門会誌発刊にあたり、今回寄稿の機会を頂きましたこと、同門生、そして 地域の精神医療に携わるものとして大変光栄に存じます。

私は、平成10年4月に教室に入局し、多くの先輩、同僚のもと、精神科医としての人生をスタートしました。当時の教室の和やかな雰囲気、先輩方から色々指導いただいたことが今でも鮮明に思い出されます。初期研修の後、下都賀総合病院へ派遣となり、4年間、精神科急性期・慢性期治療、リエゾン精神医学、社会復帰事業など多くの経験の機会を得ました。その後、平成16年春、大学に復帰しましたが、医局員が少なく、教室運営、診療とも大変困難な状況でありました。しかし、同門会が結成され、多くの同門の先生方から、心強い言葉や協力を得て、何とか病棟医長、医局長の任を全うすることができましたこと、大変感謝いたしております。教室が、多くの新しい仲間を迎え、活気を取り戻したのを見届け、私は退職いたしましたが、今秋、下田教授のもと、診療、研究とも充実し、同門会誌が、近年の多数の業績報告と共に発刊されることとは、私にとって大変感慨深いことありです。

現在、私は室井病院副院長として診療にあたっております。16年ぶりの郷里での生活は、町並みも大きく変わり、浦島太郎になった心境ですが、先日、長男の小学校入学式に出席し、母校の校歌を久々に聴き、改めて郷里に戻ってきたことを実感いたしました。私は、精神科病院での勤務は今回が初めてであり、合併症の患者様や治療に難渋する患者様に遭遇すると、今まで自分が恵まれた環境の中で仕事をしていたことを痛感いたします。一方、地域の精神科病院として、地域の医療機関と連携医療を行う際には、リエゾン精神医学に関わる機会を多く得たことが大変貴重な経験となっております。また、デイケア、援護寮、グループホーム、訪問看護など、今までの私の診療の中で、あまり接することのなかった分野に関わることが増え、精神科医として「より長く」「そして広く」患者さんを診療することができるようになりました。そして、何より、病院全体をマネージメントする立場となり、その重責を痛感すると共に、まだまだ勉強することが山積しており、今後は、同じような境遇でご苦労されている同門先輩方に、引き続きご指導、ご教授いただければと思っております。そして、当院の基本理念である「地域のために、そして地域と共に」のもと、自分の理想とする精神科病院を目指し、地域に良質な精神科医療を提供したいと考えております。

現在、当院は、医師の派遣、患者様のご紹介や受け入れなど、教室の先生方や同門の先生方より多大なご協力をいただいております。栃木県の精神科医療にとって、獨協医科大学精神神経医学教室の「人の輪」はなくてはならないものであり、この人の輪が硬く、太く、大きな輪となり、医療、研究とも充実されることが「栃木県の精神科医療の充実」に不可欠とかと思います。教室ならびに同門会の皆様のますますの繁栄とご発展をお祈りして、私の同門会誌寄稿とさせていただきます。

研究室便り ---

ゲノム精神薬理学グループ

大平下病院 獨協医科大学精神神経医学教室非常勤講師 渡邊 崇

獨協医科大学精神神経医学教室ゲノム精神薬理学グループでは、下田和孝教授の指導のもと、2004年6月よりパニック障害専門外来を開設し、パニック障害患者の専門治療にあたるとともに詳細な症状評価、治療薬の血中濃度、薬物代謝・受容体・トランスポーターなどの遺伝子型といったデータを分析してより合理的な薬物療法の開発に取り組んでいる。

これまでの結果から、SSRIのパロキセチンでパニック障害の治療を行なった場合、初期治療においてパロキセチン血中濃度高値、5-HTT gene-linked polymorphic region (5-HTTLPR)遺伝子多型L alleleの保有が、治療効果不良因子であることが示された。この結果から、SSRIの初期治療反応性について中枢5-HT神経系における5-HT1A自己受容体のdown regulationが関与することが想定された。以上をまとめて第15回日本臨床精神神経薬理学会、第104回日本精神神経学会総会シンポジウム(organizer: 秋山一文教授、下田和孝教授)にて発表した。特に後者では不安障害のオーダーメイド薬物療法の可能性について論じ、好評を得た。

平成19年12月より、鮎瀬 武、石黒 慎らの若手が当研究グループに加わり、これまでの研究をより発展させた課題に熱心に取り組んでいる。両名ともなかなかの逸材であり、将来が楽しみである。今後もこの研究を発展させることで、医療技術の向上と、当教室と地域医療の発展に尽くしたいと思う。



左より上田幹人、石黒 慎、渡邊 崇、下田和孝、鮎瀬 武、佐伯吉規

− 教室便り ─

人事往来(2003年4月以降)

■2003年度

久郷亜季、岡山大学より学内助手として赴任(2003年6月1日)

金 亨徹、道願慎次郎、岡本浩之、森 和也、久邇晃子、湊 崇暢、東京大学より研修医として赴任(2003年6月1日)

湊 崇暢、東京大学に転任(2003年12月31日)

阿部万洋、東京大学より学内助手として赴任(2004年1月1日)

久郷亜季、岡山大学へ転任(2004年3月31日)

■2004年度

渡邊 崇、下都賀総合病院へ転任(2004年4月1日)

悳 武人、室井病院へ転任(2004年4月1日)

小杉真一、室井秀太、鈴木武士、下都賀病院より助手として赴任(2004年4月1日)

上田幹人、滋賀医科大学より大学院研究生(2004年4月1日)

西川清香、臨床心理士として採用(2004年4月1日)

道願慎次郎、久邇晃子、金 亨徹、阿部万洋、東京大学へ転任(2004年5月31日)

西垣志帆、宮永かほり、東京大学より助手として赴任(6月1日)

森 和也、東京大学へ転任(2004年7月1日)

岡本浩之、岡本台病院へ転任(2004年10月1日)

■2005年度

小杉真一、学内講師に昇任(2005年4月1日)

佐伯吉規、東京都立荏原病院より助手として赴任(2005年6月30日)

森 和也、東京大学よりレジデントとして赴任(2005年5月1日)

仲谷 誠、武蔵野赤十字病院に転任(2005年3月31日)

斎藤 淳、東北大学大学院より本学大学院に転入(2006年1月1日)

■2006年度

上田幹人、助手として採用(2006年4月1日)

室井宏文、石黒 慎、レジデントとして採用(2006年4月1日)

下田和孝、学内教授に昇任(2006年5月1日)

石川高明、財団法人 東京都保健医療公社大久保病院より学内助手として赴任(2006年10月1日)

■2007年

秋山一文、精神生物学講座主任教授として転任(2007年4月1日)

斎藤 淳、精神生物学講座助教として採用(2007年4月1日)

大曽根 彰、東京女子医科大学より講師として赴任(2007年4月1日)

藤井久彌子、滋賀医科大学より学内講師として赴任(2007年4月1日)

鮎瀬 武、大栗有美子、萩野谷真人、レジデントとして採用(2007年4月1日)

下田和孝、主任教授に昇任(2007年5月1日)

佐伯吉規、学内講師に昇任(2007年7月1日)

森 和也、佐藤病院へ転任(2007年8月1日)

■2008年

斎藤 聡、学内助教として赴任(2008年4月1日)

室井宏文、石黒 慎、学内助教として採用(2008年4月1日)

尾関祐二、准教授として国立精神神経センター神経研究所より赴任(2008年10月1日)

岡安寛明、レジデントとして東京慈恵会医科大学より赴任(2008年10月1日)

室井宏文、朝日病院に転任(2008年10月1日)

石黒 慎、氏家病院に転任(2008年10月1日)

2008年11月現在の教室スタッフ

主 任 教 授 下田和孝

准 教 授 尾関祐二

講 師 大曽根 彰

学内講師 小杉真一、藤井久彌子、佐伯吉規

助 教 鈴木武士、上田幹人

学内助教 石川高明、斎藤 聡

レジデント 鮎瀬 武、岡安寛明、大栗有美子、萩野谷真人

大学院生 石黒 慎(社会人大学院生)

臨床心理士 小西 徹

臨床心理士 船場美佐子

臨床心理士 坂本靖子 (パートタイム)

(派遣) 石黒慎(氏家病院)

非常勤講師 朝日公彦、朝日晴彦、黒田仁一、駒橋 徹、中野隆史、藤沼仁至、堀 彰、

室井秀太、渡邉昭彦、渡邊 崇

着任のあいさつ

獨協医科大学 精神神経医学教室 准教授 尾 関 祐 二

平成20年10月1日付で獨協医科大学、精神神経医学教室 准教授を拝命いたしましたので、ご 挨拶申し上げます。

よくある話なのですが、卒後研修中、精神医学にはあまりにも未解決な問題が多く、患者の苦悩を解決できないことが少なくないという学生時代の感覚を強く再認し、研究活動にも携わるようになりました。疾患研究ではいわゆる基礎研究者の重要性がますます増していますが、患者と直接かかわる研究者の存在なくして疾患研究は進まないため、臨床と研究の両立にこだわりたいと考え臨床教室教官の道を選択しました。現在は統合失調症の遺伝学的な所見と病態仮説(神経発達障害仮説、グルタミン酸機能低下仮説など)とを橋渡しする研究を中心に行っています。生理と病理は一体のものであり、疾患の解明と侵される組織や器官などの生理機能解明は不可分のものです。こうした考えに基づくと、統合失調症の解明は患者とその周囲の人の苦悩を解決するばかりでなく、ヒト独特の複雑な論理性や創造性といった、人類のみが持つ脳の生理機能の秘密を解き明かすことにつながると考えられます。このように統合失調症研究は人と人社会の多くの問題に一つの解を与える可能性もあると期待しています。

これからは栃木のいろいろな事に刺激を受けながら、少しでも新たな知見を得ることができるよう、臨床、教育、研究に邁進したいと思いますので、皆様のご支援をいただければ幸いです。 これからよろしくお願いいたします。

新入医局員挨拶

平成16年より開始された新臨床研修制度で入局の状況も大きく変わりました。今回は新臨床研修制度を経験した後に入局した医局員に自己紹介してもらうことにしました。

石黒 慎(医師5年目 山形県鶴岡市出身)

初期の研修医ローテーション制度で外科や内科の研修を経て、精神科を研修した時の衝撃は忘れることができません。すっかり精神科の魅力に取りつかれて、現在は氏家病院で臨床を中心にご指導をいただきつつ、大学の研究チームにも所属しています。今後はより有益な治療を提供できるように精進したいと考えています。

室井 宏文(医師5年目 栃木県大田原市出身)

精神科へ入局してから三年が経ちました。入局当初は同年代の医局員が少なく寂しさを日々感じていたことを思い出します。現在は、医局員も増え、活気もあり、うれしい限りであります。 10月より朝日病院へ出向となりましたが、今後ともよろしくお願いいたします。

鮎瀬 武(2007年4月入局 栃木県大田原市出身)

出身は栃木県の那須塩原市で、高校は当科の先輩でもある室井秀太先生、宏文先生と同じく大田原高校に通学しておりました。大学時代はアイスホッケー部に所属しておりましたが、現在はまったく運動をしておらず、体重は大学時代より20kgも増えてしまいました。当科に入局してから1年半ちょっと、まだまだわからないことだらけで、諸先輩方には御迷惑をかけることも多いと思いますが、今後ともよろしくお願いします。

萩野谷 真人 (医師4年目 茨城県出身)

私は医学部時代、臨床研修医となった時点でも全く精神科医になることなど考えていませんでした。研修医としてローテートした際に佐伯先生、齊藤淳先生(現精神生物学教室)にご指導を賜わり、精神科の興味深さや患者さんと向き合い、責任を持つ姿勢を教えていただきました。いつのまにか吸い込まれるように入局し、さらに精神医学の面白さに気づかされました。今後も精一杯、臨床の現場で頑張っていきたいと思います。

大栗 有美子(医師4年目 栃木県出身)

内科開業医である父の後ろ姿を見て育った私は、内科への入局を視野に入れて研修が始まりました。しかし、精神的分野への興味が高まり、当医局の雰囲気がよかったこともあり、現在に至っております。入局してからは、日々悩み、患者様の言動に振り回される毎日です。日々模索する毎日ですが、少しでも患者様のお役にたてるように精進していきたいと思います。

岡安 寛明(医師4年目 埼玉県出身)

平成20年10月から入局した岡安寛明です。平成17年に東京慈恵会医科大学卒業し、その後、形成外科をやっておりました。中途からの入局で皆さんにはご迷惑をかけることも多々あると思いますが、皆様のご指導のほどよろしくお願いします。皆様と楽しく仕事ができれば幸いです。

── 写真で見る教室の動き ──



2004年当時の医局集合写真



新潟中越地震被災者に対する精神医療支援 (2004年11月)



医局旅行(2004年10月、那須)



Edoardo Spina教授(University of Messina)と ともに(2007年11月)



医局旅行(2007年2月、鬼怒川温泉)



渡邊 崇 2005年日本臨床精神神経薬理学会賞 (Paul Janssen賞)受賞



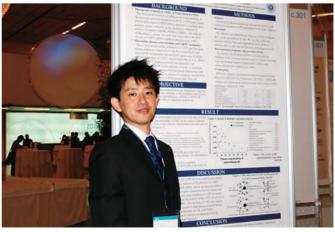
こんなことまでして盛り上げてます。医局員には「本人が楽しんでいる」といわれていますが・・・ (2008年7月、納涼会)



年々、派手になる忘年会(2006年12月忘年会)



Pacific Rim Association for Clinical Pharmacogenetics, Busan(2008年4月)にて左から染矢俊幸教授(新潟大学)、Dr. Vural Ozdemir(University of Montreal)、Prof Leif Bertilsson(Karolinska Institute),下田、古郡規雄講師(弘前大学)



European College of Neuropsychopharmacology, Vienna にて佐伯吉規先生発表(2007年10月)



日本心身医学会にて室井宏文先生発表 (2008年6月、札幌)



European College of Neuropsychopharmacology, Barcelona にて 石黒 慎先生、鮎瀬 武先生(2008年9月)



第83回東京精神医学会にて



研究「させられ体験」、つらいっす・・・



Oh… my ball, where are you going?? (鬼怒公園ゴルフコースでの実践ラウンドレッスン)



2008年秋 医局集合写真

- 2003年~2007年の教室業績 ---

獨協医科大学精神神経医学教室·主任教授 下 田 和 孝

今回、同窓会誌の紙面をお借りして、業績をまとめさせていただくことを黒田仁一会長にご快 諾いただきましたことを深謝いたします。

小生が「年報を出すお手伝い」をするということを2003年12月以来、忘年会のたびに約束しておりました。しかしながら、一に小生の怠慢のため、約束は不履行のまま、あっという間に5年が過ぎてしまいました。紙面をお借りし、深くお詫び申し上げます。

さて、以下は2003年~2007年までの獨協医科大学精神神経医学教室の業績であります。この数年、徐々にではありますが、文部科学研究費・厚生労働省科学研究費等の外部競争資金の獲得が出来るようになっていること、若手の先生方のresearchへのmotivationが向上してきていることは研究業績を積み重ねるための下地つくりとして、よい兆候であると認識しています。小生が当教室に主任教授として就任した際に「臨床診断・治療に役立つ技術・情報を臨床現場に還元できる国際的なパースペクティブをもつ研究者を獨協医科大学精神神経医学教室から輩出することを目指す」という目標をかかげました。しかし、その目標の達成のために小生が一番重要と考えている、original work、特に英文原著が少なく、今後、教室員が一丸となって相当な努力が必要と考えております。教室員のmorale, motivationを向上させ、かつそれを維持していくのが教室をお預かりしている小生の重要な仕事と思っております。

今後とも皆様のご指導、ご鞭撻を切にお願いする申し上げる次第です。

- 2003年 -

<英文原著>

Mori A, Nakano T, Asahi K, Akiyama K. Longitudinal changes in quantitative EEG and event-related potentials in healthy elderly volunteers: A 4-year follow-up study. Dokkyo Journal of Medical Sciences 30:23-28, 2003.

Iwamitsu Y, Shimoda S, Abe H, Kodama M, Okawa M.

The differences of the emotional distress between patients with emotional inhibition and patients emotional inhibition and those with emotional expression: The impact of diagnosis of breast cancer. Psychiatry & Clinical Neuroscience 57:289-294, 2003

Suzuki Y, Shioiri T., Muratake T, Kawashima Y., Shimoda K. and Someya, T.

Effects of concomitant fluvoxamine on metabolism of alprazolam in Japanese psychiatric patients: Interaction with CYP 2 C19 mutated alleles. European Jounal of Clinial Pharmacology, 58:829-833, 2003.

Someya T, Shimoda K, Suzuki Y, Sato S, Kawashima Y, Hirokane G, Morita S, Yokono A, Inoue Y, Takahashi S. The effect of CYP 2 D 6 genotypes on haloperidol metabolism in a Japanese psychiatric population. Neuropsychopharmacology 28:1501-1505, 2003.

<和文原著>

岩満優美、下田和孝、相浦玲子、大川匡子 Courtauld Emotional Control Scale日本語版の作成と信頼性・妥当性の検討 精神科診断学 18:701-708、2003.

仲谷 誠

非定型抗精神病薬による抗うつ剤補強療法. 精神科治療学 18:341-346.2003.

<症例報告>

室井秀太、佐伯吉規、小杉真一、清水輝彦、秋山一文 入院中に肺血栓栓塞症を合併した統合失調症の一例. 精神科治療学 18:839-842, 2003.

<分担執筆>

上田幹人、森田幸代、広兼元太、下田和孝 緩和医療における薬物相互作用-知っておきたい作用機序と副作用-各論:鎮痛補助薬、81-95、真興交易、2003.

下田和孝

「臨床薬理学」第二版

中枢神経作用薬の臨床薬理 2. 抗うつ薬 医学書院 406-409、2003.

下田和孝

向精神薬の薬理遺伝学、

キーワード精神第3版、170-171、先端医学社、2003.

広兼元太、下田和孝

疾患から見た臨床薬理学 (第二版)、気分障害、294-300、じほう、2003.

野口俊文、下田和孝

ダイナミックメディスン 向精神薬の薬理学 西村書店 27:41-44, 2003.

仲谷 誠

異常食欲、異常性欲、異常体験、異常知覚、異食. 医学大辞典(伊藤正雄 他編)、医学書院、東京、2003.

<総説>

渡邊 崇、秋山一文

神経症性障害,ストレス関連障害及び身体表現性障害 手袋型脱失、視聴覚喪失.日本臨床別冊 精神医学症候群I 515-518, 2003.

渡邊 崇、秋川一文

症状精神病. ビタミン欠乏性精神障害.日本臨床別冊精神医学症候群Ⅲ 378-382, 2003.

秋山一文、惠 武人

強迫性障害の生物学的研究の進歩、精神科 3:488-490, 2003.

中村俊規、仲谷 誠、斎藤 学

今考える、PTSD/DIDの脳機能性虐待、そしてトラウマティック・メモリー無言の防衛と症状化、さらに精神病発病へ アディクションと家族 19:493-508, 2003.

<その他>

松尾雅博、下田和孝

パーキンソン病患者に見られる薬剤性精神病症状の治療としてolanzapineは有用か? 臨床精神薬理 6:75-76, 2003.

高橋正洋、森田幸代、下田和孝

不眠を訴える睡眠時無呼吸症候群患者にzopicloneを投与してよいか?

臨床精神薬理 6:229-230, 2003.

森田幸代、下田和孝

Carbamazepineの双極性障害に対する臨床効果と血中濃度の間に有意な関係は認められるか臨床精神薬理 6:339-340, 2003.

青木净亮、広兼元太、森田幸代、下田和孝

Paroxetineを大量服薬した症例で注意すべき点は?

臨床精神薬理 6:474-476, 2003.

北野雅史、広兼元太、森田幸代、下田和孝

Benzodiazepine系薬物は乳汁分泌や女性化乳房、高プロラクチン血症をひきおこすか? 際広味地帯理 CC11 C12 2002

臨床精神薬理 6:611-612, 2003.

松尾雅博、広兼元太、森田幸代、下田和孝

Biperidenに乱用の危険はあるか?

臨床精神薬理 6:767-768, 2003.

市村麻衣、森田幸代、下田和孝

小児の精神疾患におけるolanazapineの治療効果・副作用について知りたい

臨床精神薬理 6:921-922, 2003.

高橋正洋、廣兼元太、森田幸代、下田和孝

急性lithium中毒により持続性の神経障害が生じるか?

臨床精神薬理 6:474-476, 2003.

森田幸代、下田和孝

paroxetine投与で緑内障が発症するか?

臨床精神薬理 6:1179-1180, 2003.

渡邉 崇、下田和孝

けいれん発作を起こしやすい向精神薬は?

臨床精神薬理 6:1327-1328、2003.

上田幹人、森田幸代、下田和孝 睡眠障害の持続とセントジョーンズワートとは関連があるか? 臨床精神薬理 6:1463-1464、2003.

湊 崇暢、下田和孝

Tandospirone投与でセロトニン症候群が起こりうるか? 臨床精神薬理 6:1609-1610、2003.

仲谷 誠

リスペリドンによる抗うつ剤補強療法 外来精神医療 2:56,2003.

仲谷 誠

コロ 日本臨床 38:144-147, 2003.

仲谷 誠

カウンセリングのレベル 獨協医科大学保健室年報 (2002年版)、2003.

<報告書>

秋山一文、惠 武人、下田和孝

メタンフェタミン、フェンシクリジン投与による前シナプス側関連蛋白 mRNA発現と転写因子Nurr 1 mRNAの変化.厚生科学研究費補助金(医薬安全総合研究事業)「規制薬物の依存及び神経毒性の発現に係わる仕組みの分子生物学的解明に関する研究」

平成14年度総括研究報告書, 58-67, 2003.

<特別講演・シンポジウム>

秋山一文

覚せい剤精神病の薬物治療. 第15回日本アルコール精神医学会、2003年9月5日、京都

下田和孝

シンポジウム「遺伝子多型と臨床応用|

抗うつ薬の薬物動態と遺伝子多型

第13回日本臨床精神神経薬理学会、2003年10月1日-3日、弘前

下田和孝

シンポジウム「ニコチン-基礎から臨床まで|

喫煙による向精神薬の薬物動態変化

第33回日本神経精神薬理学会、2003年10月8日-10日、奈良

<ランチョンセミナー>

下田和孝

サイコオンコロジー臨床に求められる向精神薬の知識 第16回日本サイコオンコロジー学会、2003年6月12-13日、相模原

<その他の講演>

下田和孝

向精神薬の薬物動態と治療効果の関係:精神科ゲノム薬理学の夜明け明治製菓学術講演会、2003年7月17日、宇都宮

下田和孝

新規抗うつ薬の薬理学と薬物相互作用 -薬理遺伝学からゲノム薬理学へ-栃木県薬剤師会講演会、2003年10月16日、宇都宮

下田和孝

がん患者の心のケア サイコオンコロジーとは? 2003年10月24日、東京都港区医師会講演会、東京 下田和孝

向精神薬のpharmacogenetics:精神科薬物療法の個別化 第31回獨協医科大学神経科学懇話会 平成15年11月18日

<国際学会発表>

Ueda M, Hirokane G, Morita S, Okawa M, Shimoda K.

Paroxetine steady-state plasma concentrations in relation to CYP 2 D 6 genotypes in Japanese psychiatric patients

11th meeting of Pacific Rim Association for Clinical Pharmacogenetics, November. 3-4, 2003, Los Angeles, USA

Hirokane G, Morita S, Ueda M, Okawa M, Shimoda K.

The relationship between antidepressive effect and adverse effect of paroxetine and serotonin transporter polymorphism in Japanese depressive patients.

11th meeting of Pacific Rim Association for Clinical Pharmacogenetics, November, 3-4, 2003, Los Angeles, USA

<国内学会発表>

渡邉昭彦、仲谷 誠

ADHDの精神療法 -薬物療法と社会心理的介入- 第4回日本サイコセラピー学会、2003年1月25日-26日、東京

秋山一文、悳 武人、下田和孝:メタンフェタミン、フェンシクリジン投与による前シナプス側関連蛋白 mRNA発現の変化平成14年度厚生科学研究費補助金(医薬安全総合研究事業)研究「規制薬物の依存及び神経毒性の発現に係わる仕組みの分子生物学的解明に関する研究」報告会、東京、2003年2月14日

鈴木武士、仲谷 誠、能重和正、渡邉昭彦、岩脇 淳、秋山一文、大森健一 痴呆老人の重症度における家族の対応 第22回日本社会精神医学会、2003年3月7日-8日、千葉

阿部 元、岩満優美、紺谷桂一、花澤一芳、谷 徹、下田和孝、大川匡子 診断告知に伴う乳癌患者の心理的苦痛について -否定的感情の抑制傾向と不安特性から-第103回日本外科学会、2003年6月4日-6日、札幌

岩満優美、下田和孝、阿部 元、大川匡子 乳癌患者の初診時の心理的特徴と退院後の心理的苦痛との関係 第16回日本サイコオンコロジー学会、2003年6月12日-13日、相模原

岩満優美、下田和孝、阿部 元、谷 徹、大川匡子 乳がん患者の心理的特徴と治療経過中の心理的苦痛との関係 第8回日本緩和医療学会、2003年6月27日-28日、千葉

広兼元太、森田幸代、上田幹人、大川匡子、下田和孝 Paroxetineの抗うつ効果・副作用の出現とserotonin transporter遺伝子型の関連 第13回日本臨床精神神経薬理学会、2003年10月1日-3日、弘前

森田幸代、市村麻衣、松尾雅博、田中和秀、広兼元太、上田幹人、大川匡子、下田和孝 Paroxetine投与により重篤な副作用(低Na血症・せん妄・心房細動)を呈した症例 第13回日本臨床精神神経薬理学会、2003年10月1日-3日、弘前

森田幸代、広兼元太、上田幹人、大川匡子、下田和孝

Clobazam併用によりphenytoin中毒症状を呈した1症例:Cytochrome P450遺伝子多型との関連について第13回日本臨床精神神経薬理学会、2003年10月1日-3日、弘前

上田幹人、広兼元太、森田幸代、大川匡子、下田和孝

日本人精神疾患患者におけるパロキセチン血漿中濃度とcytochrome P450 (CYP) 2D6 遺伝子型との関連 (第2報)

第13回日本臨床精神神経薬理学会、2003年10月1日-3日、弘前

惠 武人、下田和孝、秋山一文

修正電気けいれん療法の効果の維持に難渋した1例. 第49回栃木県精神医学会、宇都宮、2003年11月15日

広兼元太、森田幸代、上田幹人、大川匡子、下田和孝

Paroxetineの抗うつ効果や副作用とserotonin transporter遺伝子型との関連

第24回日本臨床薬理学会、横浜、2003年12月11日-12日

上田幹人、広兼元太、森田幸代、大川匡子、下田和孝

日本人精神疾患患者においてcytochrome P450(CYP) 2D6遺伝子型がパロキセチン血漿中濃度におよぼす影響

第24回日本臨床薬理学会、横浜、2003年12月11日-12日

- 2004年 -

<英文原著>

Isao T, Akiyama K.

Effect of acute and chronic treatment with methamphetamine on mRNA expression of synaptotagmin IV and 25 KDa-synaptic-associated protein in the rat brain.

Psychiatry and Clinical Neuroscience 58:410-419, 2004.

Nakaya, M. Olanzapine treatment of monosymptomatic hypochondriacal psychosis General Hospital Psychiatry 26:166-167, 2004

<和文原著>

岩脇 淳、能重和正、森 東、室井秀太、駒橋 徹 統合失調症外来患者の主観的QOL 日本社会精神医学会雑誌 13:53-60, 2004.

<著書(分担執筆)>

秋山一文

精神医学を理解するための神経科学. 4. 神経化学の進歩.専門医をめざす人の精神医学(山内俊雄、小島卓也、倉知正佳編)、pp23-pp26、医学書院、東京、2004

秋山一文

精神医学を理解するための認知行動科学. 1. 感覚・知覚.専門医をめざす人の精神医学(山内俊雄、小島卓也、倉知正佳編)、pp38-pp41、医学書院、東京、2004

秋山一文

統合失調症. 2. 成因.専門医をめざす人の精神医学(山内俊雄、小島卓也、倉知正佳編)、pp364-pp365、医学書院、東京、2004

森田幸代、下田和孝

B.精神疾患治療薬 3.うつ状態、うつ病 SSRIとSNRIだけでうつ病は治療できるか? 精神科必須薬をさぐる(宮岡 等編)、pp36-pp46、中外医学社、2004

<症例報告>

市村麻衣、森田幸代、田中和秀、廣兼元太、下田和孝、山田尚登、大川匡子

Paroxetineの内服中に低ナトリウム血症を来し、抗利尿ホルモン不適合分泌症候群(SIADH)と診断された 高齢患者 2 症例

精神医学 46:505-511, 2004.

仲谷 誠、大森健一

Olanzapineによる皮膚寄生虫妄の治療経験、総合病院精神医学 16:167-171, 2004.

<総説>

渡邊 崇、下田和孝

精神科領域におけるPharmacogenetics

Current Insights in Neurological Science 12:8-9, 2004.

下田和孝、小杉真一、室井秀太、鈴木武士、森田幸代 身体疾患患者に対する向精神薬投与に際しての留意点 総合病院精神医学 16:11-17, 2004.

秋川一文、小杉真一

V. 検体検査 3.血中尿中アミン、アミン代謝産物. 臨床精神医学2004年増刊号 精神科臨床評価検査マニュアル、pp474-477, 2004.

渡邊 崇、下田和孝

E.うつ病の最新治療 抗うつ薬のPharmacokinetics

Clinical Neuroscience 22:200-201, 2004.

廣兼元太、下田和孝

臨床医に必要な神経薬理 遺伝子多型と薬物応答性

(6) 抗精神病薬の薬物動態と薬理遺伝

Clinical Neuroscience 22:130-131, 2004.

金 亨徹、下田和孝

臨床医に必要な神経薬理 遺伝子多型と薬物応答性

(6) 抗うつ薬の薬物動態と薬理遺伝 Clinical Neuroscience 22:362-363, 2004

下田和孝

喫煙による抗精神病薬の薬物動態変化

日本神経精神薬理学雑誌 24:67-70, 2004.

室井秀太、下田和孝

身体症状の強いうつ病

今月の治療 12:772-774, 2004.

鈴木武士、仲谷 誠、室井秀太、下田和孝、小杉真一、平田幸一 痴呆を中心とした老年期の心の病気について. 心と社会 35:80-86, 2004

上田幹人、下田和孝

抗うつ薬の薬物動態と遺伝子多型

分子精神医学 4:194-198, 2004.

森田幸代、下田和孝

肺癌患者に対する精神的ケア (不安/不眠/抑うつ/せん妄)

呼吸器科 6:286-292, 2004.

廣兼元太、下田和孝

第IV編. 生化学的検查

H.薬物分析検査 5.精神神経用薬 ブチロフェノン系薬、

「日本臨床」2004年増刊「広範囲血液・尿化学検査、免疫学的検査 第6版ーその数値をどう読むかー」377-379、2004.

秋山一文

覚せい剤精神病の薬物療法. 日本アルコール精神医学雑誌 11:53-56, 2004.

<その他>

森田幸代、下田和孝

Carbamazepine投与中の患者の衝動行為に対してQuetiapine投与を考慮している。相互作用は生じるか? 臨床精神薬理 7:83-84, 2004.

廣兼元太、下田和孝

バルプロ酸によって体重増加が生じるか?

臨床精神薬理 7:278-279, 2004.

道願慎次郎、下田和孝

臨床精神薬理 7:381-382, 2004.

岡本浩之、下田和孝

バルプロ酸ナトリウムは多嚢胞卵巣症候群を惹起しうるか?

臨床精神薬理 7:670-671, 2004.

久邇晃子、下田和孝

膵炎の既往のある統合失調症患者にolanzapineの投与を考慮している。Olanzapineが膵炎を発祥させる可能性はあるか?

臨床精神薬理 7:865-866, 2004.

森田幸代、下田和孝

臨床精神薬理 7:1337-1338, 2004.

上田幹人、下田和孝

Amoxapineは他の抗うつ薬に比較して抗うつ薬の発現が早いのか

臨床精神薬理 7:1497-1498.

西垣志帆、下田和孝

Binswanger病にdonepezilは有効か

臨床精神薬理 7:1655, 2004.

宮永かほり、下田和孝

DonepezilはLewy小体病の治療に有効か?

臨床精神薬理 7:1817-1818, 2004.

渡邊 崇、下田和孝

Mianserineで骨髄抑制は起きるか?

臨床精神薬理 7:1947-1948, 2004.

<国際学会発表>

Iwamitsu Y, Shimoda K, Abe H, Tani T, OkawaM, Buck R.

The relationship between negative emotional suppression and expression in breast cancer diagnosis and treatment of older adults.

28th Internationala Congress of Psychology, Beijing, China, August 8-13, 2004

Hirokane G, Morita S, Ueda M, Okawa M, Shimoda K.

Influence of the serotonergic gene polymorphism on clinical response and adverse effects of paroxetine in Japanese depressive patients.

17th meeting of European College of Neuropsychopharmacology, Stockholm, Sweden, October 9-14, 2004

<国内学会発表>

岩満優美、下田和孝、阿部 元、花澤一芳、谷 徹、大川匡子 乳がん患者への心理的介入の試み

第17回日本サイコオンコロジー学会、2004年5月13日-14日、博多

鈴木武士、仲谷 誠、室井秀太、下田和孝、秋山一文、平田幸一

痴呆の対応や理解を家族が深めるための専門機関としての役割 第19回日本老年精神医学会,2004年6月25日-26日、松本 岡本浩之、金 亨徹、久郷亜希、室井秀太、下田和孝、秋山一文 ECTが有効であった14歳発症した統合失調症 mECTが著効した一例 第71回東京精神医学会、2004年7月20日、東京

惠 武人、石河三貴子、渡邊 崇、下田和孝、秋山一文 慢性リチウム投与によるメタンフェタミン誘発性ArcmRNA発現への効果 第26回生物学的精神医学会、第34回日本神経精神薬理学会、2004年7月22日-23日、東京

秋山一文、恵 武人、河野祥子、渡邊 崇、下田和孝 フェンシクリジン急性投与によって誘発されるNurr 1 mRNA発現に及ぼす抗精神薬前処置の効果 第26回生物学的精神医学会、第34回日本神経精神薬理学会、2004年 7 月22日-23日、東京

広兼元太、森田幸代、上田幹人、大川匡子、下田和孝

日本人におけるparoxetineの副作用出現とserotonin transporter及びserotonin 2 A receptor遺伝子型の関連第25回日本臨床薬理学会、2004年9月17日-18日、静岡

廣兼元太、森田幸代、上田幹人、大川匡子、下田和孝

Paroxetineの副作用出現とserotonin transporter及びserotonin 2 A receptor遺伝子型の関連-日本人うつ病患者における検討-

第14回日本臨床精神神経薬理学会、2004年9月30日-10月1日、神戸

鈴木武士、仲谷 誠、室井秀太、下田和孝、秋山一文、平田幸一 地域での痴呆に対する理解、第24回日本社会精神医学会、2004年10月24日-27日、神戸

岩満優美、下田和孝、大川匡子、宮岡 等 感情抑制傾向にある乳がん患者に対する心理的介入の試み 第17回日本総合病院精神医学会、2004年11月26日-27日、東京

- 2005年 -

<英文原著>

Matsuda N, Yuki T, Akiyama K, Hirata K.

Effects of tobacco smoking on frontal lobe function in normal healthy volunteer.

Dokkyo Journal of Medical Sciences 32:81-83, 2005.

Iwamitsu Y, Shimoda K, Abe H, Tani T, Okawa M, Buck R.

The relationship between negative emotional suppression and emotional distress in breast cancer patients. Health Communication 18:201-215, 2005.

Iwamitsu Y, Shimoda K, Abe H, Tani T, Okawa, M, Buck R.

Anxiety, emotional suppression, and psychological distress before and after breast cancer diagnosis. Psychosomatics, 46:19-24, 2005.

Reist C, Albers LJ, Marder SR, Williams-Jones B, Wu JC, Mee S, Shimoda K, Someya T, Ozdemir V. Pharmacogenomic testing for aripiprazole and third-generation atypical antipsychotics: strategies for next generation studies. Current Pharmacogenomics 3:305-318, 2005.

<症例報告>

岡本浩之、金 亨徹、久郷亜希、室井秀太、下田和孝、秋山一文 14歳発症した統合失調症 -mECTが著効した1例- 東京精神医学会誌 23:1-6, 2005.

<総説>

佐伯吉規、下田和孝 精神科薬物療法の基本 抗うつ薬 月刊精神科 6:430-436, 2005.

上田幹人、下田和孝

精神神経科疾患用薬のファーマコジェノミクスと薬剤感受性

最新医学 60:1904-1907, 2005.

秋山一文、渡辺昌祐、山下龍子

思いやりのある抗うつ薬治療: 臨床精神薬理 8:665-670, 2005.

秋山一文、佐伯吉規

電気痙攣療法の最近の知見.精神科 7:449-452, 2005.

秋山一文、室井秀太

第2章 統合失調症の病理・病態生理・成因 発達障害仮説、新しい診断と治療のABC 32最新医学別冊 統合失調症 (上島国利編)、pp73-pp80, 最新医学社、2005.

<その他>

森田幸代、下田和孝

活動減少型のせん妄の治療について知りたい

臨床精神薬理 8:93-94, 2005.

上田幹人、下田和孝

ステロイド惹起性気分障害に対して気分安定薬(lithium, carbamazepine, valproate)は効果があるか? 臨床精神薬理 8:201-202, 2005.

広兼元太、下田和孝

Risperidone投与によりQTc間隔延長やtorsades de pointesが生じうるか

臨床精神薬理 8:327-3282, 2005.

小杉真一 下田和孝

Tourette Disorder の薬物療法について

臨床精神薬理 8:528-530, 2005.

上田幹人、下田和孝

リスペリドン内用液剤の効果発現は早いのか?また、早いとすれば、その理由は?

臨床精神薬理 8:735-736, 2005.

宮永かほり、下田和孝

せん妄・傾眠など中枢神経系副作用の少ない麻薬性鎮痛薬としてどのようなものが考えられるか?

臨床精神薬理 8:949-950, 2005.

室井秀太、下田和孝

ECT施行中にlithiumを投与しないほうが良いのはなぜか?

臨床精神薬理 8:1105-1106, 2005.

西垣志帆、下田和孝

うつ病に対する甲状腺ホルモン製剤の標準的な使い方について知りたい

臨床精神薬理 8:1253-1254, 2005.

鈴木武士、下田和孝

広汎性発達障害や注意欠陥/多動性障害(Attention-Deficit Hyperactivity Disorder:ADHD)には抗うつ薬は有効か?

臨床精神薬理 8:1441-1442, 2005.

上田幹人、下田和孝

うつ病治療においてECT後の寛解維持のための薬物療法はどのように行うべきか?

臨床精神薬理 8:1575-1576, 2005.

佐伯吉規、下田和孝

向精神薬による口渇に対してどのような対処法があるのか

臨床精神薬理 8:1727-1728, 2005.

渡邊 崇、下田和孝

躁病に対するclonazepamの有効血中濃度はどのくらいか

臨床精神薬理 8:1963-1964, 2005.

<分担執筆>

秋山一文

覚せい剤精神疾患. 今日の治療指針2005年版、pp683-684、医学書院、東京、2005.

<著書>

そこが知りたい 薬物療法Q&A (編 染矢俊幸、下田和孝、渡部雄一郎)、星和書店、2005.

<国際学会シンポジウム>

Iwamitsu Y, Shimoda K, Abe H, Tani T, Okawa M, Miyaoka H & Buck R.

The Relationship among anxiety, emotional suppression, and psychological distress before and after breast cancer diagnosis.

New perspectives in affective science, January 28-30, 2005, Kyoto, Japan

Shimoda K, Watanabe K, Ueda M.

Pharmacogenetic research of pharmacokinetics of neuroleptics and antidepressants:

Relevance to their therapeutic effects

2 nd symposium of Korean Pharmacogenetic Research Network, March 18, 2005, Seoul, Korea.

Shimoda K.

Pharmacogenetic research of neuroleptics and antidepressants in Japan: Relevance to their pharmacokinetics and therapeutic effects

12th meeting of Pacific Rim Association for Clinical Pharmacogenetives, April 17-18, 2005, Kyoto, Japan.

<国際学会発表>

Watanabe T, Ueda M, Hirokane G, Morita S, Okawa M, Akiyama K, Shimoda K.

An association between serotonin transporter polymorphism and the severity of panic disorder, clinical effect of paroxetine in a Japanese population

12th meeting of Pacific Rim Association for Clinical Pharmacogenetics, April 17-18, Kyoto, Japan.

Watanabe T, Ueda M, Saeki Y, Hirokane G, Morita S, Okawa M, Akiyama K, Shimoda K.

An association between 5-HTTLPR and the severity, clinical effect of paroxetine in patients with panic disorder

18th meeting of European College of Neuropsychopharmacology, October 22-27, 2005, Amsterdam, Netherland.

Akiyama K.

Pharmacological treatment of methamphetamine psychosis.

International Society for Neurochemistry/European Society for Neurochemistry Sponsored Satellite Meeting. Cellular and Molecular Mechanisms of Drugs of abuse and Neurotoxocity: Cocaine, GHB, and Substituted Amphetamines. August 18, 2005, Isola di San Servo, Venice, Italy

Akiyama K, Isao T, Ishikawa M, Ueda M, Watanabe T, Shimoda K.

Effect of neuroleptics on phencyclidine-induced mRNA expression of immediate early genes Nurr 1 and NGFI-B

35th Annual Meeting of Society for Neuroscience, November 11-16, 2005, Washington D.C., USA

<国内学会発表>

渡邊 崇、上田幹人、佐伯吉規、廣兼元太、森田幸代、大川匡子、秋山一文、下田和孝パニック障害患者の初期治療反応性とparoxetine血中濃度の関係 第15回日本臨床精神神経薬理学会、2005年10月11日-13日、東京

秋山一文、石河三貴子、惠 武人、上田幹人、渡邊 崇、下田和孝 扁桃核キンドリングによる最初期遺伝子Nurrl, NGFI-B発現への影響 第39回日本てんかん学会、2005年10月14日、旭川

渡邊 崇、上田幹人、佐伯吉規、秋山一文、下田和孝 Paroxetineによるパニック障害の初期治療反応性とparoxetine血中濃度の関係について 第33回獨協医学会、2005年12月1日-3日

上田幹人、渡邊 崇、佐伯吉規、廣兼元太、森田幸代、大川匡子、秋山一文、下田和孝パニック障害患者におけるparoxetineに対する初期治療反応性とparoxetine血中濃度の関係第26回日本臨床薬理学会、2005年12月1日-3日、別府

パニック障害に対するparoxetineの初期治療反応性と血中濃度との関連 渡邊 崇、上田幹人、佐伯吉規、廣兼元太、森田幸代、大川匡子、秋山一文、下田和孝 第38回精神神経系薬物治療研究報告会 平成17年12月9日、大阪

<その他の講演会>

下田和孝

「うつ」ってなんだろう?

壬生町健康福祉センター講演会 2005年3月23日

下田和孝、渡邊 崇、佐伯吉規、上田幹人 新規抗うつ薬のゲノム薬理学 北里大学精神科研究会、2005年7月7日

下田和孝

一般診療科におけるパニック障害について 加須医師会講演会 2005年7月21日

がん患者のメンタルケア GSK Psycho-Oncology研究会、2005年12月16日

- 2006年 -

<英文原著>

Akiyama K.

Longitudinal clinical course following pharmacological treatment of methamphetamine psychosis which persists after long-term abstinence. Annals of the New York Academy of Sciences. Vol 1074 (Cellular and Molecular Mechanisms of Drugs of Abuse and Neurotoxocity: Cocaine, GHB, and Substituted Amphetamines):125-134, 2006.

Ueda M, Hirokane G, Morita S, Okawa M, Watanabe T, Akiyama K, Shimoda K.

The impact of CYP 2 D 6 genotypes on the plasma concentration of paroxetine in Japanese psychiatric patients. Progress in Neuropsychopharmacology & Biological Psychiatry, 30:486-91, 2006.

<症例報告>

幻覚、妄想に対してクエチアピンが奏功したパーキンソン病の1例 渡邊 崇、西垣志帆、室井秀太、星山栄成、平田幸一、下田和孝、秋山一文 東京精神医学会誌 24:1-5, 2006.

<総説>

佐伯吉規、仲谷 誠、下田和孝

統合失調症の認知機能、QOL ~非定型抗精神病薬が果たす役割とは~ 臨床精神薬理、9:389-395, 2006.

秋山一文、室井秀太、佐伯吉規、斎藤 淳、小杉真一、下田和孝 新規抗精神病薬へのスイッチング-遅発性運動障害の治療の視点から-臨床精神薬理、9851-861, 2006.

渡邊 崇、下田和孝

選択的セロトニン再取り込み阻害薬 (SSRI) によるパニック障害の治療 最新精神医学 11:369-372, 2006.

室井秀太、下田和孝 新しい抗うつ薬の臨床適応 臨床薬理 37:259-263, 2006.

上田幹人、下田和孝 新しい抗うつ薬の薬理作用の特徴 臨床薬理 37:255-258, 2006.

秋山一文、斉藤 淳 ストレスと精神障害 Dokkyo Journal of Medical Sciences 33:204-212, 2006.

佐伯吉規、下田和孝 がん患者の心理的ケア(サイコオンコロジー)について Dokkyo Journal of Medical Sciences 33:213-217, 2006.

上田幹人、下田和孝

特集/ベンゾジアゼピン系薬物の功罪 6. ベンゾジアゼピンの奇異反応 臨床精神医学 35:1663-1666, 2006.

<分担執筆>

秋山一文

聴覚発作 (auditory seizure)、pp14-pp15、てんかん学用語辞典 日本てんかん学会、2006.

青木治亮、下田和孝、大川匡子

睡眠覚醒リズム障害に対する高照度光療法 pp122-pp123

睡眠障害診療のコツと落とし穴(編集:上島国利)、中山書店、2006.

秋山一文、小杉真一、室井秀太、下田和孝

抗精神病薬による遅発性錐体外路症状治療のアルゴリズム. 統合失調症の治療手順-薬物療法のアルゴリズム-改訂版 (精神科薬物療法研究会編)、医学書院 pp73-pp93, 2006.

渡邊 崇、下田和孝

臨床精神薬理学テキストブック(日本臨床精神神経薬理学会編) 薬物有害反応 星和書店、pp99-pp109, 2006.

<報告書>

渡邉 崇、上田幹人、佐伯吉規、廣兼元太、森田幸代、大川匡子、秋山一文、下田和孝パニック障害に対するparoxetineの初期治療反応性と血中濃度との関連精神薬療研究年報 38:155-159, 2006.

<その他>

上田幹人、下田和孝 せん妄の治療に、ベンゾジアゼピン系薬物は有効か? 臨床精神薬理 9:57-58, 2006. 小杉真一、下田和孝

パーキンソン病/症候群治療薬で、幻覚・妄想、せん妄などの精神神経系副作用が出現しにくいものはどれか?

臨床精神薬理 9:245-246, 2006.

室井秀太、森田幸代、下田和孝

双極性障害のうつ病相に使用しても躁転の可能性が低い抗うつ薬は?

臨床精神薬理 9:442-444. 2006.

渡邊 崇、森田幸代、下田和孝

急性腎不全となり血液透析の導入が必要となった患者が、精神運動興奮・被害妄想を伴ったせん妄状態を呈したため、鎮静が必要となった。どのような薬物が推奨されるか?

臨床精神薬理 9:631-632, 2006.

渡邊 崇、森田幸代、下田和孝

63歳男性、急性腎不全となり血液透析の導入が必要となった患者が、精神運動興奮・被害妄想を伴ったせん 妄状態を呈したため、鎮静が必要となった。どのような薬物が推奨されるか?

臨床精神薬理 9:631-632, 2006.

上田幹人、森田幸代、下田和孝

66歳女性、子宮癌のため手術予定であるが、躁状態を呈している。気分安定薬の選択は?

臨床精神薬理 9:907-908, 2006.

佐伯吉規、森田幸代、下田和孝

妊娠8ヶ月の妊婦。境界性人格障害にて外来通院中の患者。フルニトラゼパム2 mg、トリアゾラム0.25 mgを眠前投与している。出産にむけて中止あるいは変更した方がよいか?

臨床精神薬理 9:1185-1187, 2006.

渡邊 崇、森田幸代、下田和孝

双極性障害の26歳の女性、lithium600mg/日投与で維持療法を行っていたが、妊娠が判明した。妊娠中の薬物療法はどのように行うべきか?

臨床精神薬理 9:1365-1367, 2006.

上田幹人、森田幸代、下田和孝

不眠の患者に睡眠剤を投与する場合、深睡眠が得られやすい睡眠剤はどれか

臨床精神薬理 9:1577-1578, 2006.

室井宏文、下田和孝

Restless legs syndromeの診断とその治療について

臨床精神薬理 9:1819-1820, 2006.

渡邊 崇、森田幸代、下田和孝

Tourette disorderに対して新規抗精神病薬は有効か?

臨床精神薬理 9:2067-2068, 2006.

森田幸代、下田和孝

肺癌のためgefitinib内服中であるが、うつ状態となった。抗うつ薬を投与したいので、gefitinibと抗うつ薬との薬物相互作用について知りたい。

臨床精神薬理 9:2271-2272, 2006.

渡邊 崇、森田幸代、下田和孝

癌性疼痛に対する鎮痛補助薬として、三環系抗うつ薬、SSRI、SNRIのうち第一選択薬となるのは? 臨床精神薬理 9:2497-2499, 2006.

秋山一文: 巻頭言. 医療安全雑感. 精神医学 48:594-595, 2006.

<国際学会シンポジウム>

Shimoda K.

Pharmacogenetics of neuroleptics and antidepressants: relevance to their pharmacokinetics and therapeutic effects. XXV Collegium Internationale Neuropsychopharmacologicum, July 9-13, 2006, Chicago, USA

Shimoda K.

Pharmacogenetic research in psychiatry: The relevance to therapeutic effects of psychotropics in schizophrenia, mood disorder and panic disorder

2006 Joint Symposium of Korean Society for Clinical Pharmacology and Therapeutics & Japanese Society of Clinical Pharmacology and Therapeutics, November 11, 2006, Jeju, Korea

Akivama K.

Pharmacological treatment of methamphetamine psychosis which persists after long-term abstinence. 2006 Taiwan CNS Forum, August 5, 2006, Taiwan

<国際学会発表>

Saito A, Akiyama K, Shimoda K, Ito C, Fujikura-Ouchi Y, Kuramasu A, Matsuoka H. Alteration of putative promoter polymorphisms in the neuroplastin gene with schizophrenia 36th annual meeting of Society for Neuroscience, October 14-18 2006, Atlanta, USA

<国内学会シンポジウム>

下田和孝

シンポジウム「抗うつ薬は自殺を増す可能性はないか」 「選択的セロトニン再取り込み阻害薬 (SSRI) は自殺の危険性を増加させるのか?」 第16回日本臨床精神神経薬理学会、2006年10月25-27日、北九州市

<国内学会発表>

渡邊 崇, 上田幹人, 佐伯吉規、秋山一文, 下田和孝パニック障害に対するパロキセチンの治療反応性に関する薬物動態学的及び薬理遺伝学的検討第54回栃木県精神医学会、2006年2月4日、宇都宮

佐伯吉規、下田和孝、宮本雅之、宮本智之、平田幸一、秋山一文 睡眠時無呼吸症候群(SAS)を合併したうつ病患者の二例 第27回栃木県心身医学研究会、2006年2月25日、宇都宮

西川清香

幼児期に急性リンパ性白血病に罹患した小学校高学年男児の箱庭療法過程. 日本芸術療法学会芸術療法研修セミナー、2006年8月12日、東京

西川清香

全ての歯が抜ける夢を報告した思春期女子との面接過程. 第25回日本心理臨床学会大会、 2006年9月12日、大阪

斉藤 淳、藤倉雄太、倉増敦郎、下田和孝、秋山一文、松岡洋夫、伊藤千裕 統合失調症におけるNeuroplastin (NPTN) 遺伝子多型、Basigin (BSG) 遺伝子多型との関連研究 第28回日本生物学的精神医学会、2006年9月14日、名古屋

上田幹人、渡邊 崇、佐伯吉規、広兼元太、森田幸代、大川匡子、秋山一文、下田和孝パニック障害のパロキセチンによる治療反応性とパロキセチン血中濃度、5 HTT gene-linked polymorphism region (5 HTTLPR) 遺伝子型との関連 第16回日本臨床精神神経薬理学会、2006年10月25日-27日、北九州

佐伯吉規、上田幹人、渡邊 崇、秋山一文、下田和孝 paroxetine血中濃度の高値により意識障害を呈した悪性腫瘍末期患者の一例 第16回日本臨床精神神経薬理学会、2006年10月25日-27日、北九州 薄井佳子、藤原利男、岩谷さおり、土岡 丘、砂川正勝、西川清香、植田 静、杉田憲一 心理カウンセリングが有効と考えられた鼓腸の1例.第17回日本小児外科QOL研究会学術集会、2006年11月26日、大阪

渡邊 崇、上田幹人、佐伯吉規、秋山一文 パニック障害に対するparoxetineの初期治療反応性に影響を与える因子の検討 第55回栃木県精神医学会、2006年11月18日、宇都宮

鉄欠乏性貧血に伴う精神病性障害の一例

上田幹人、森 和也、山本義知、佐伯吉規、斉藤 淳、下田和孝、秋山一文 平成18年度栃木県医学会(日本医師会生涯教育講座) 2006年11月26日、宇都宮

上田幹人、渡邊 崇、佐伯吉規、広兼元太、森田幸代、大川匡子、秋山一文、下田和孝 パロキセチン血中濃度、5 HTT gene-linked polymorphism region(5 HTTLPR)遺伝子型とパニック障害の 初期治療反応性について 第27回日本臨床薬理学会、2006年11月29日-12月2日、東京

佐伯吉規、上田幹人、渡邊 崇、秋山一文、下田和孝 Proxetine血中濃度の高値により意識障害を呈した乳がん全身転移患者の一例 第19回日本総合病院精神医学会、2006年12月1日-2日、宇都宮

石黒 慎、佐伯吉規、下田和孝、秋山一文 誤嚥性肺炎を誘発した統合失調症に修正電気けいれん療法が奏功した一例 第19回日本総合病院精神医学会、2006年12月1日-2日、宇都宮

室井宏文、佐伯吉規、下田和孝、秋山一文 修正電気けいれん療法に関する効率化、安全向上に関する検討 第19回日本総合病院精神医学会、2006年12月1日-2日、宇都宮

<その他の講演会>

下田和孝 中高年自殺・うつ病対策について 2006年9月12日、真岡

<ラジオ出演>

下田和孝

新しい抗うつ薬の薬理学 薬理遺伝学と相互作用、ラジオNikkei(平成18年2月21日放送)

室井秀太

うつ病について

CRT栃木放送「長寿万歳」(2006年4月9日放送)

- 2007年 -

<英文原著>

Watanabe T, Ueda M, Saeki Y, Hirokane G, Morita S, Okawa M, Akiyama K, Shimoda K. High plasma concentrations of paroxetine impede clinical response in patients with panic disorder Therapeutic Drug Monitoring 29:40-44. 2007

Saito A, Fujikura-Ouchi Y, Kuramasu A, Shimoda K, Akiyama K, Matsuoka H, Ito C. Association study of putative promoter polymorphisms in the neuroplastin gene and schizophrenia Neuroscience Letter, 411:168-173, 2007

Kakiuchi C, Ishiwata M, Nanko S, Kunugi H, Minabe Y, Nakamura K, Mori N, Fujii K, Umekage T, Tochigi M, Kohda K, Sasaki T, Yamada K, Yoshikawa T, Kato T.

Association analysis of HSP90B 1 with bipolar disorder. Journal of Human Genetics 52:794-803, 2007.

Kakiuchi C, Ishiwata M, Nanko S, Kunugi H, Minabe Y, Nakamura K, Mori N, Fujii K, Yamada K, Yoshikawa T, Kato T.

Association analysis of ATF 4 and ATF5, genes for interacting-proteins of DISC1, in bipolar disorder. Neuroscience Letter 417:316-321, 2007.

Munakata K, Fujii K, Nanko S, Kunugi H, Kato T.

Sequence and functional analyses of mtDNA in a maternally inherited family with bipolar disorder and depression.

Mutatition Research. 617:119-124, 2007.

<和文原著>

一杉正仁、菅谷 仁、平林秀樹、下田和孝、妹尾 正、田所 望、古田裕明、上田秀一 予備校模擬試験を用いた学生の不得意問題抽出の試み Dokkyo Journal of Medical Sciences 34:29-33, 2007.

一杉正仁、菅谷 仁、妹尾 正、平林秀樹、下田和孝、田所 望、古田裕明、五十嵐吉彦、上田秀一 医師国家試験における頻出事項についての解析 Dokkyo Journal of Medical Sciences 34:95-100, 2007.

<症例報告>

室井 秀太、石黒 慎、下田 和孝、秋山 一文 Zonisamideにより精神病症状を呈したてんかんの一例 栃木精神医学 27: 37-41, 2007.

齋藤 淳、佐伯吉規、鈴木武士、室井宏文、下田和孝、秋山一文 多彩な精神症状を示し、治療に難渋したペンタゾシン中毒の一例 精神科11:405-410, 2007.

<総説>

秋山一文、齋藤 淳 薬物依存の研究の進歩 脳と精神の医学 18:73-82, 2007.

藤井久彌子、下田和孝 うつ病の薬物療法 Mebio 24:30-37, 2007.

室井秀太、下田和孝 新規抗うつ薬のうつ病以外への臨床適応 Mebio 24:93-99, 2007.

佐伯吉規、濱口眞輔、下田和孝 修正電気けいれん療法 Mebio 24:39-50, 2007.

新しい抗うつ薬の薬理学 萩野谷真人、佐伯吉規、下田和孝、 綜合臨床 56:2758-2760, 2007.

鮎瀬 武、下田和孝

I-7-3 「持続勃起症」 精神科治療学22巻増刊号「抗精神病薬の副作用:予防・早期発見・治療ガイドライン」、142-143、2007.

大曽根 彰、下田和孝 抗精神病薬の副作用 -糖代謝異常を中心に-臨床薬理 38:409-411, 2007.

<分担執筆>

佐伯吉規

今日の治療指針2007 私はこうして治療している (総編集:山口 徹、北原光男、福井次矢) 薬剤による 精神障害 pp688-pp689, 医学書院、2007

<その他>

石黒 慎、佐伯吉規、森田幸代、下田和孝 クロナゼパム投与中の患者が妊娠した。投与を中止すべきか? 臨床精神薬理 10:91-92, 2007.

渡邊 崇、下田和孝

新規抗精神病薬はパニック障害に対して有効か? 臨床精神薬理 10:309-310, 2007.

上田幹人、渡邊 崇、下田和孝 ミルナシプランの副作用で血圧に関する注意事項は? 臨床精神薬理、10:459-460, 2007.

渡邊 崇、下田和孝

非定型抗精神病薬の投与により躁症状が誘発されるか? 臨床精神薬理、10:667-678, 2007.

室井宏文、齋藤 淳、渡邊 崇、下田和孝精神症状を伴うParkinson病にaripirazoleは有効か? 臨床精神薬理、10:789-790, 2007.

齋藤 淳、渡邊 崇、下田和孝 選択的セロトニン再取り込み阻害薬 (SSRI) は意識消失を起こしうるか? 臨床神薬理、10:990-991, 2007.

渡邊 崇、下田和孝

前向性健忘を最も起こしやすいbenzodiazepine系薬物は? 臨床神薬理、10:1201-1202, 2007.

石黒 慎、佐伯吉規、渡邊 崇、下田和孝 大うつ病性障害に対してあるSSRIが無効であった場合、他の新規抗うつ薬への切り替えは有効であるのか? 臨床神薬理、10:1455-1456, 2007.

渡邊 崇、下田和孝

双極性障害の混合状態の治療に適した向精神薬を教えてほしい 臨床神薬理、10:1711-1712, 2007.

渡邊 崇、下田和孝

新規抗精神病薬の一日あたりの至適投与回数は? 臨床神薬理、10:1888-1889, 2007.

萩野谷真人、渡邊 崇、下田和孝 Aripiprazoleは遅発性錐体外路症状に対して有効か? 臨床神薬理、10:2056-2058, 2007.

室井宏文、渡邊 崇、下田和孝 Donepezilの薬物相互作用について知りたい 臨床神薬理、10:2237-2238, 2007.

下田和孝

精神医学におけるゲノム薬理学と個別化医療

Psychiatry Today 13:21-23, 2007.

下田和孝

お酒について

医療者のつぶやき 東京新聞 2007年5月10日

<報告書>

尾関祐二、藤井久彌子、辻 啓子、栗本直樹、大川匡子、功刀 浩、堀江 稔 向精神薬によるQTc延長リスクの遺伝学的評価 精神薬療研究年報 39: 114-117, 2007.

<国際学会発表>

Ozeki Y, Fujii K, Kurimoto N, Tsuji K, Yamada N, Okawa M, Aoki T, Takahashi J, Ishida N, Narita M, Saito O, Horie M, Kunugi H. Risk factors of QT interval prolongation in 1000 patients with schizophrenia Fourteenth Biennial Winter Workshop on Schizophrenia and Bipolar Disorders February 3-7, 2008, Montreux, Switzerland

Saeki Y, Watanabe T, Ueda M, Hirokane G, Morita S, Okawa M, Akiyama K, Shimoda K.

An investigation of clinical factors which influence the initial therapeutic effect of paroxetine in patients with panic disorder 20th annual meeting of European College of Neuropsychopharmacology, Vienna, Austria, Oct 13-17, 2007.

<国内学会シンポジウム>

下田和孝

慢性疼痛患者の心をさぐる 精神科医の立場から ~精神科医による疼痛の治療アプローチ~ 第37回日本慢性疼痛学会、2008年2月22日-23日、宇都宮

<国内学会発表>

佐伯吉規、濱口眞輔、下田和孝 認められぬ病~線維筋痛症~

第4回マイルドデプレッション研究会、2007年3月15日、宇都宮

尾関祐二、藤井久彌子、栗本直樹、辻 啓子、大川匡子、堀江 稔、功刀 浩 向精神薬の治療におけるQT延長の要因について、第2回日本統合失調症学会、2007年3月24日-25日、富山

大栗有美子 佐伯吉規 下田和孝 遷延性うつ病にMCIが関与した一例 第26回栃木県精神科学術講演会、2007年6月21日、宇都宮

濱口眞輔、手塚薫子、深川大吾、木村嘉之、北島敏光、佐伯吉規 線維筋痛症候群が疑われた2症例に対する修正電気痙攣療法による治療経験 第41回日本ペインクリニック学会、2007年7月5日-7日、横浜

手塚薫子、濱口眞輔、佐伯吉規、深川大吾、木村嘉之、北島敏光、手塚隆夫 修正型電気痙攣療法によって症状の改善をみた非定型顔面痛の1症例 第41回日本ペインクリニック学会、2007年7月5日-7日、横浜

尾関祐二、藤井久彌子、栗本直樹、辻 啓子、山田尚登、大川匡子、青木建亮、高橋淳、石田展弥、成田実、 斉藤 治、堀江 稔、功刀 浩

統合失調症患者を対象としたQT延長をきたす要因の検討、第29回日本生物学的精神医学会、2007年7月11日-13日、札幌

渡邊 崇、上田幹人、佐伯吉規、下田和孝 パニック発作を呈した潜在性甲状腺機能低下症の1例 第3回栃木県・不安・抑うつフォーラム、2007年9月27日、小山

上田幹人、渡邊崇、佐伯吉規、廣兼元太、森田幸代、山田尚登、大川匡子、秋山一文、豊平由美子、柳原

延章、下田和孝

Paroxetine血中濃度とserotonin transporter阻害の関係について 第17回日本臨床精神神経薬理学会、2007年10月3日-10月5日、大阪

藤井久彌子、下田和孝 治療に難渋した双極性障害の症例 第26回栃木気分障害研究会、2007年11月15日、宇都宮

佐伯吉規、石黒 慎、濱口眞輔、下田和孝 修正電気けいれん療法が奏功したABC症候群の一例 第20回日本総合病院精神医学会、2007年11月30日-12月1日、札幌

大栗有美子、佐伯吉規、下田和孝 「悪性症候群を合併した統合失調症」と診断されたAIDS脳症の一例 第20回日本総合病院精神医学会、2007年11月30日-12月1日、札幌

萩野谷真人、佐伯吉規、石黒 慎、下田和孝 Evans症候群を合併した解体型統合失調症の一例 第20回日本総合病院精神医学会、2007年11月30日-12月1日、札幌

上田幹人、渡邊 崇、佐伯吉規、廣兼元太、森田幸代、山田尚登、大川匡子、秋山一文、豊平由美子、柳原 延章、下田和孝

Paroxetine血中濃度とserotonin transporter、noradrenaline transporter阻害効果の関係について 第28回日本臨床薬理学会、2007年11月28日-12月1日、宇都宮

室井宏文、佐伯吉規、大曽根 彰、下田和孝 成人の周期性嘔吐症の一例 第57回栃木県精神医学会、2007年12月1日、宇都宮

<その他の講演>

下田和孝

現代社会のストレスについて 陽明会講演会、2007年5月17日、宇都宮

下田和孝

うつ病の診断と治療

下都賀郡市医師会講演会、2007年8月29日、栃木

下田和孝

うつ病の診断と治療

佐野市医師会講演会、2007年9月19日、佐野

下田和孝

うつ病の診断と治療

大田原市医師会講演会、2007年9月26日、大田原

うつてなんだろう?

佐野市職員メンタルヘルス講座、2007年10月11日、佐野

うつ病の診断と治療

二金会(宇都宮市産婦人科医会)講演会、2007年10月12日、宇都宮

下田和孝、渡邊 崇、佐伯吉規、上田幹人 精神科におけるオーダーメイド薬物治療について 第3回栃木県精神科精神科診療所協会講演会、2007年10月21日、宇都宮 藤井久彌子

認知症の周辺症状について

獨協医科大学老人性認知症疾患センター講演会、2007年11月9日

<ラジオ出演>

下田和孝 睡眠障害について 「教えてドクター」 栃木放送 (2007年9月7日・8日放送)

下田和孝 うつ病について「教えてドクター」 栃木放送 (2007年9月14日・15日放送)

大曽根 彰 パニック障害について「教えてドクター」 栃木放送 (2007年9月21日・22日放送)

大曽根 彰 認知症について 「教えてドクター」 栃木放送 (2007年9月28日・29日放送)

編集後記

2009年1月某日深夜、本誌の校正を行なっている。当初は「少々のミスには目をつぶって、とにかく発行することが大事」と思っていた。しかし、完成が近づくにつれ、小さいところまで気になってきた。原稿を読んでみると、これまでの教室の歴史が目に浮かんでくるし、特に2003年~2007年についてはデジタルカメラのおかげで映像としても掲載できている。なかなかの出来である。「可愛くて仕方がなくなってきた」のである。IT時代の昨今、こういった年報は教室ホームページに記載すれば、紙媒体では不要という向きもあろう。しかし、こういった同門会誌の編集も教室員の育成のための一つのtoolになるように思う。大切なことはこれを絶やさず、駅伝のように「襷」をつないでいくことである(KS)。

獨協医科大学精神神経医学教室 同門会誌 第1号

平成21年2月1日発行

編集発行人 獨協医科大学精神神経医学教室同門会

発 行 所 獨協医科大学精神神経医学教室同門会

獨協医科大学精神神経医学教室内 栃木県下都賀郡壬生町大字北小林880番地

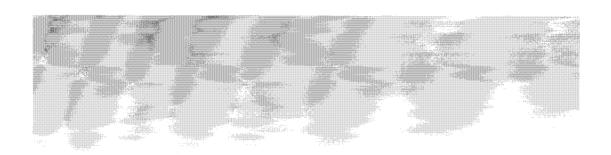
TEL 0282-86-1111 (代表)

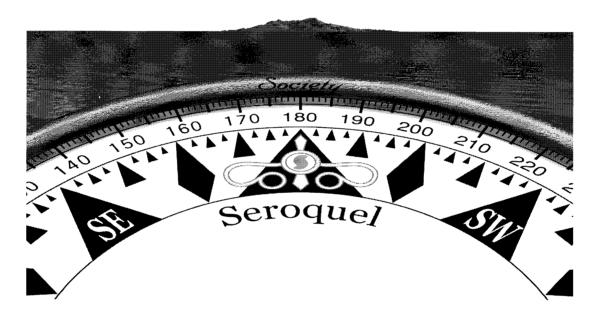
印刷所(株)松井ピ・テ・オ・印刷

栃木県宇都宮市陽東5丁目9番21号

TEL 028-662-2511









抗精神病剤(フマル酸クエチアピン製剤)

25mg錠·100mg錠 細粒50%

劇薬、指定医薬品、処方せん医薬品 (注意一医師等の処方せんにより使用すること) Seroquel®

■「効能・効果」「用法・用量」「警告・禁忌を含む使用上の注意」等につきましては、 製品添付文書をご参照ください。

製造販売 アステラス製薬株式会社 東京都板橋区連根3-17-1

[資料請求先]本社/東京都中央区日本橋本町2-3-11



ABILIFY



抗精神病薬

劇薬、指定医薬品、処方せん医薬品

注意一医師等の処方せんにより使用すること

エピリファイ

錠3^{mg} 錠6^{mg}

郵 6^{™⁵} 錠 12^{™g}

题 12^m。 图 散 1%

ABILIFY®

〈アリピプラゾール製剤〉

薬価基準収載

◇効能・効果、用法・用量、警告・禁忌を含む使用上の注意及び用法・用量に関連する 使用上の注意等は、製品添付文書をご参照ください。



製造販売元

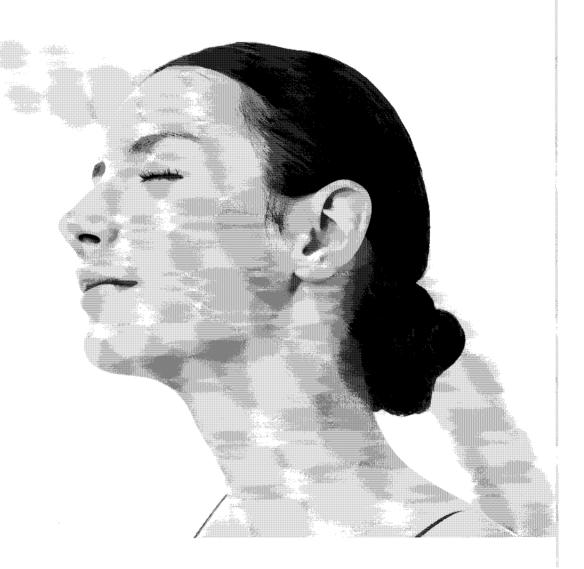
大塚製薬株式会社

Otsuka 東京都千代田区神田司町2-9

資料請求先

大塚製薬株式会社 信頼性保証本部 医薬情報センター 〒108-8242 東京都港区港南2-16-4 品川グランドセントラルタワー 13F

〈'08.06作成〉



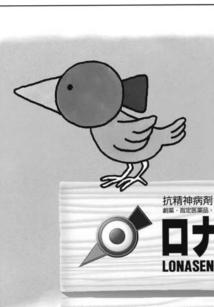
選択的セロトニン再取り込み阻害剤(SSRI)

Paxii®パロキセチン塩酸塩水和物
薬価基準収載
劇素・指定医薬品・処方せん医薬品(注意一医師等の処方せんにより使用すること)

「効能・効果」、「効能・効果に関連する使用上の注意」、「用法・用量」、「用法・ 用量に関連する使用上の注意」、「警告・禁忌を含む使用上の注意」等に ついては、製品添付文書をご参照ください。

製造販売元・資料購収先 グラクソ・スミスクライン株式会社〒151.8586 東京都渋谷区千駄ヶ谷 4-6-15 GSKビル http://glaxosmithkline.co.jp http://pakil.jp

大阪市中央区淡路町 2-5-6



大日本住友製薬

新発売

ロナセシ 鉄2mg·4mg 散2%

I NNASFN® ブロナンセリン製剤

提携 吉富薬品株式会社

- 部価基準収載

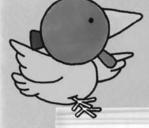
●「効能・効果」、「用法・用量」、「用法・用量に関連する使用上の注意」、「禁忌を 含む使用上の注意」等につきましては添付文書をご参照ください。

イルーラン 錠16mg 新発売



Lullan ベロスピロン塩酸塩錠

提携 吉富薬品株式会社



●「効能・効果」、「用法・用量」、「禁忌を含む使用上の注意」等につきましては 添付文書をご参照ください。

抗精神病剤-

菜位

セレネース

日本薬局方 ハロペリドール錠 錠0.75mg/錠1mg/錠1.5mg/錠3mg

細粒1%/内服液0.2%/注5mg

Serenace® ハロベリドール製剤

●「効能・効果」、「用法・用量」、「用法・用量に関連する使用上の注意」、「禁忌を含む使用上の注意」等につきましては添付文書をご参照ください。

私たち大日本住友製薬は精神科領域の治療をサポートし、 患者さんとそのご家族のために、新しい薬づくりに取り組んでいます。

製造販売元(資料請求先)

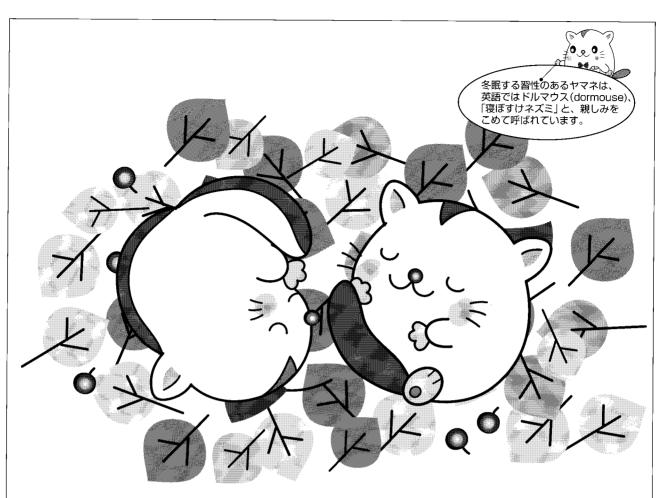
大日本住友製薬株式会社

〒541-0045 大阪市中央区道修町2-6-8

〈製品に関するお問い合わせ先〉

くすり情報センター

© 0120-03-4389 受付期 月~金9:00~17:30(税・祭日を除く) 【医療情報サイト】 http://ds-pharma.jp/



睡眠障害改善剤

クアゼパム錠 向精神薬、習慣性医薬品^{注1)}、指定医薬品、処方せん医薬品^{注2)} **DORAL**® TABLETS 薬価基準収載

| 米加季牛収車注1)注意-習慣性あり

注2)注意一医師等の処方せんにより使用すること

※〈禁忌〉〈原則禁忌〉〈効能・効果〉〈用法・用量〉〈使用上の注意〉等の詳細については、 製品添付文書をご参照ください。



販売(資料請求先) 田辺三菱製薬株式会社 大阪市中央区道修町3-2-10

製造販売元

小 久光製薬株式会社

佐賀県鳥栖市田代大官町408

プロモーション提携



吉富薬品株式会社 大阪市中央区淡路町 2-5-6 http://www.yoshitomi.jp/



^{製造} エスエス製薬株式会社

東京都中央区日本橋浜町2-12-4

DR-(A4) 2008年3月作成

虚弱な体質で 神経がたかぶるものの 症、不眠症に

(薬価基準収載)

虚弱な体質で神経がたかぶって、怒りやすい、イライラする、 眠れないなどの症状を訴える場合に使用します。

興奮性、焦燥感などの神経症症状(認知症患者の周辺症状 〈BPSD〉など)や日常生活動作(ADL)を改善します。 *BPSD: Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia

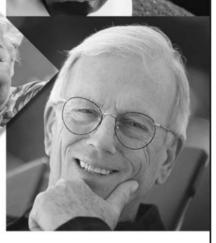
神経系(グルタミン酸、セロトニン)への作用が認められ、 BPSD様モデルでの攻撃抑制が認められています。 (マウス、ラット)²⁾³⁾

■主な副作用は偽アルドステロン症、ミオパシーなどです。

1) Iwasaki, K. et al. J.Clin. Psychiatry. 66 (2), 248 (2005) 2) 伊東宏昌ほか. 日本薬学会. (2006) 玉野春南ほか. 日本薬学会. (2007) 3) 石橋歩美ほか. 薬学雑誌. 126 (2), 82 (2006) 藤原道弘ほか. 日本老年医学会学術集会. (2006)







虚弱な体質で神経がたかぶるものの次の諸症: 神経症、不眠症、小児夜なき、小児疳症

|用法及び用量

通常、成人1日7.5gを2~3回に分割し、食前又は食間に経口投与する。なお、年齢、体重、症状により適宜増減する。

|使用上の注意(抜粋)

1. 慎重投与(次の患者には慎重に投与すること) (1) 著しく胃腸の虚弱な患者 (2) 食欲不振、悪心、嘔吐のある患者 1. 重要な基本的注意 (1) 本剤の使用にあたっては、患者の証(体質・症状) を考慮して投与すること。なお、経過を十分に観察し、症状・所見の改善が認められない場合には、継続投与を避けること。 (2) 本剤にはカンゾウが含まれているので、血清カリウム値や血圧値等に十分留意し、異常が認められた場合には投与を中止すること。 (3)他の漢方製剤等を併用する場合は、含有生薬の重 複に注意すること

3. 相互作用 併用注意(併用に注意すること)

薬剤名等:カンゾウ含有製剤、グリチルリチン酸及びその塩類を含有する製剤

4.副作用 本剤は使用成績調査等の副作用発現頻度が明確となる調査を実施していないため、発現頻度は不明である。 な副作用 1)偽アルドステロン症: 低カリウム血症、血圧上昇、ナトリウム・体液の貯留、浮腫、体重増加等の偽アルドステロン症があらわれることがあるので、観察(血清カリウム値の測定等)を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、カリウム剤の投与等の適切な処置を行うこと。 2)ミオパシー: 低カリウム血症の結果としてミオパシーがあらわれることがあ るので、観察を十分に行い、脱力感、四肢痙攣・麻痺等の異常が認められた場合には投与を中止し、カリウム剤の投与等の適切な処置を行うこと。

*その他の使用上の注意等は製品添付文書をご覧下さい。



┗┩株式会社**ツムラ** http://www.tsumura.co.jp/

●資料請求・お問い合せは弊社MR、またはお客様相談窓口まで。 **500** 0120-329-970

(2007年9月制作)



患者さんひとりひとりの 治療ゴールへ

ジプレキサ®の特徴

- ●統合失調症における幻覚・妄想などの陽性症状を改善します。
- ●統合失調症における感情的引きこもり・自閉などの
- 陰性症状を改善します。(海外データ) ●主な錐体外路症状の発現率は、アカシジア11.9%(69/580例)、
- 振戦11.4% (66/580例) などでした。(承総時)
 ●1日1回10mg投与で治療効果を示します。

副作用発現率(377例/580例)

国内降床試験において安全性解析の対象となった計580例中、副作用が377例(65.0%)に 認められた。主な副作用は不眠123例(21.2%)、眠気97例(16.7%)、体重増加95例(16.4%)、 アカシジア69例(11.9%)、振戦56例(11.4%)、倦怠感62例(10.7%)、不安・焦燥62例(10.7%)、 及び興奮・易刺激性58例(10.0%)であった。また、主な臨床検査値異常はALT(GPT)上昇 (15.8%)、プロラクチン上昇(14.5%)、AST(GOT)上昇(11.5%)、トリグリセリド上昇(10.3%) であった。(承認時)

重大な副作用

- 入な畑町FH 1) 高血糖、糖尿病性ケトアシドーシス、糖尿病性昏睡 2) 悪性症候群 (Syndrome malin) 3) 肝機能障害、黄疸

- 4) 痙攣 5) 遅発性ジスキネジア
- 6) 横紋筋融解症

【警告】

- 1.著しい血糖値の上昇から、糖尿病性ケトアシドーシス、糖尿病 性昏睡等の重大な副作用が発現し、死亡に至る場合があるの で、本剤投与中は、血糖値の測定等の観察を十分に行うこと
- 2.投与にあたっては、あらかじめ上記副作用が発現する場合が あることを、患者及びその家族に十分に説明し、口渇、多飲、 多尿、頻尿等の異常に注意し、このような症状があらわれた場 合には、直ちに投与を中断し、医師の診察を受けるよう、指導 すること。[「重要な基本的注意」の項参照]

【禁忌(次の患者には投与しないこと)】

- 1.昏睡状態の患者[昏睡状態を悪化させるおそれがある。]
- 2.バルビツール酸誘導体等の中枢神経抑制剤の強い影響下に ある患者[中枢神経抑制作用が増強される。]
- 3.本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者
- 4.エピネフリンを投与中の患者[「相互作用」の項参照]
- 5.糖尿病の患者、糖尿病の既往歴のある患者

【効能·効果】

統合失調症

【用法・用量】

通常、成人にはオランザビンとして5~10mgを1日1回経口投与により開始する。維持量として1日 1回10mg経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。ただし、1日量は20mgを超えないこと。 〈ザイディス錠〉

〈用法・用量に関連する使用上の注意〉 本剤は口腔内で速やかに崩壊することから唾液のみ(水なし)でも服用可能であるが、口腔粘膜からの吸収により効果発現を期待する製剤ではないため、崩壊後は唾液又は水で飲み込むこと。

【使用上の注意】

- 1. 慎重投与(次の患者には慎重に投与すること) (1) 尿閉、麻痺性イレウス、狭隅角緑内障のある患者[抗コリン作用により症状を悪化さ
 - せることがある。] (2) てんかん等の痙攣性疾患又はこれらの既往歴のある患者 [痙攣閾値を低下させるこ とがある。
 - (3) 肝障害のある患者又は肝毒性のある薬剤による治療を受けている患者 [肝障害を悪化 させることがある。

 - でもっている。」 (4) 高齢者 [「高齢者への投与」の項参照] (5) 本剤のクリアランスを低下させる要因 (非喫煙者、女性、高齢者)を併せ持つ患者 [本 剤の血漿中濃度が増加することがある。]
 - (6) 糖尿病の家族歴、高血糖あるいは肥満等の糖尿病の危険因子を有する患者[「重要な基本的注意」の項参照]

2. 重要な基本的注意

- 至女々毎年917年息 (1)本剤の投与により、著いい血糖値の上昇から、糖尿病性ケトアシドーシス、糖尿病性昏 睡等の致命的な経過をたどることがあるので、本剤投与中は、血糖値の測定や口渇、 多飲、多尿、頻尿等の観察を十分に行うこと。特に、高血糖、肥満等の糖尿病の危険 因子を有する患者では、血糖値が上昇し、代謝状態を急激に悪化させるおそれがある。 (2)本剤の投与に際し、あらかじめ上記制作用が発現する場合があることを、患者及びそ

- (2) 本剤の投資・ト除じ、あらかじの上記値川下用が完現する場合があることで、患者などで の家族に十分に説明し、口湯、多族、多尿、頻原等の異常に注意し、このような症状 があらわれた場合には、直ちに投与を中断し、医師の診察を受けるよう、指導すること。 (3) 本剤の投与により体重増加を来すことがあるので、肥満に注意し、肥満の徴候があら われた場合は、食事療法、運動療法等の適切な処置を行うこと。 (4)治療初期に、めまい、頻脈、起立性低血圧等があらわれることがある。心・血管疾患(心 解梗塞あるいは心筋虚血の既往、心不全、伝導異常等、脳血管疾患及び低血圧が カスを受い、特殊と使るとなると思いない。 起こりやすい状態(脱水、血液量減少、血圧降下剤投与による治療等)が認められる 場合には注意するこ
- (5) 本剤は制け作用を有するため、他の薬剤に基づく中毒、腸閉寒、脳腫瘍等による嘔 叶症状を不顕在化することがあるので注意すること。 (6) 傾眠、注意力・集中力・反射運動能力等の低下が起こることがあるので、本剤投与中
- の患者には高所での作業あるいは自動車の運転等危険を伴う機械の操作に従事さ

3. 相互作用

本剤の代謝には肝薬物代謝酵素CYP1A2が関与している。また、CYP2D6も関与してい ると考えられている。[「薬物動態」の項参照] (1)併用禁忌(併用しないこと)

薬剤名等	臨床症状·措置方法	機序·危険因子
ェビネフリン ボスミン	エビネフリンの作用を逆転 させ、重篤な血圧降下を起 こすことがある。	エビネフリンはアドレナリン 作動性α、β-受容体の刺 激剤であり、本剤のα-受容 体連動作用によりβ-受容 体刺激作用が優位となり、 血圧降下作用が増強される。

(a) 併田注音(併田に注音するマレ)

薬剤名等	臨床症状·措置方法	機序·危険因子
中枢神経抑制剤 バルビツール酸誘導体等	中枢神経抑制作用がある ので、滅量するなど注意す ること。	本剤及びこれらの薬剤は 中枢神経抑制作用を有 する。
アルコール	相互に作用を増強することがある。	アルコールは中枢神経抑 制作用を有する。
抗コリン作用を有する薬剤 抗コリン性抗パーキンソン剤 フェノチアジン系化合物 三環系抗うつ剤等	腸管麻痺等の重篤な抗コ リン性の毒性が強くあらわ れることがある。	本剤及びこれらの薬剤は 抗コリン作用を有する。
ドパミン作動薬 レボドパ製剤	これらの薬剤のドバミン作 動性の作用が減弱することがある。	ドバミン作動性神経におい て、本剤がこれらの薬剤の 作用に拮抗することによる
フルボキサミン	本剤の血漿中濃度を増加 させるので、本剤を減量す るなど注意すること。	これらの薬剤は肝薬物代謝酵素(CYP1A2)阻害作用を有するため本剤のクリアランスを低下させる。
塩酸シプロフロキサシン	本剤の血漿中濃度を増加 させる可能性がある。	
カルバマゼピン	本剤の血漿中濃度を低下 させる。	これらの薬剤は肝薬物代 謝酵素 (CYP1A2)を誘 導するため本剤のクリア ランスを増加させる。
 オメプラゾール リファンビシン	本剤の血漿中濃度を低下 させる可能性がある。	
喫煙	本剤の血漿中濃度を低下させる。	喫煙は肝薬物代謝酵素 (CYP1A2)を誘導するため本剤のクリアランスを増加させる。

4. 副作用

国内臨床試験において安全性解析の対象となった計580例中、副作用が377例 (65.0%) に認められた。主な副作用は不眠123例(21.2%)、眠気37例(16.7%)、体重 増加95例(16.4%)、アカシジア69例(11.9%)、振戦66例(11.4%)、倦怠感62例(10.7%)、 不安・焦燥62例(10.7%)、及び興奮・易刺激性58例(10.0%)であった。また、主な臨床 検査値異常はALT(GPT)上昇(15.8%)、プロラクチン上昇(14.5%)、AST(GOT)上 昇(11.5%)、トリグリセリド上昇(10.3%)であった。(オランザビン錠(普通錠)承認時) (1) 重大な副作用

- 3人・毎日1F列 1)高血糖、糖尿病性ケトアシドーシス、糖尿病性昏睡:高血糖があらわれ、糖尿病性ケトアシドーシス、糖尿病性昏睡から死亡に至るなどの致命的な経過をたどるこ とがあるので、血糖値の測定や、口渇、多飲、多尿、頻尿等の観察を十分に行い、 異常が認められた場合には、投与を中止し、インスリン製剤の投与を行うなど、適 切か処置を行うこと
- 切な処置を行うこと。
 2) 悪性症候群(Syndrome malin):無動緘黙、強度の筋強剛、脈拍及び血圧の変動、発汗等が発現し、それに引き続き発熱がみられる場合は、投与を中止し、水分補給、体冷却等の全身管理とともに、適切な処置を行うこと。本症発症時には、血清CK(CPK)の上昇や白血球の増加がみられることが多い。また、ミオグロビン・ 尿を伴う腎機能の低下に注意すること。なお、高熱が持続し、意識障害、呼吸困難、循環虚脱、脱水症状、急性腎不全へと移行し、死亡した例が報告されている。 3) 肝機能障害、黄疸:AST (GOT)、ALT (GPT)、ア・GTP、ALPの上昇等を伴う肝
- 機能障害、黄疸があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。
- た場合にはなくでもエリッのない個のない個で17ところ。 4) 痩撃・痙撃・強・値間代性・部分発作、ミオクロスス発作等)があらわれることがある ので、異常が認められた場合には、投与を中止するなど適切な処置を行うこと。 5) 遅発性ジスキネジア:長期投与により、不随意運動(特に口周部)があらわれ、投
- 与中止後も持続することがある。 6) 横紋筋融解症:横紋筋融解症があらわれることがあるので、筋肉痛、脱力感、CK(CPK)
- 上昇、血中及び尿中3イルント昇等が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。また、横紋筋融解症による急性腎不全の発症に注意すること。

その他の使用上の注意については添付文書をご参照下さい。 **抗精神病薬** 劇薬/指定医薬品/処方せん医薬品(注意一医師等の処方せんにより使用すること)



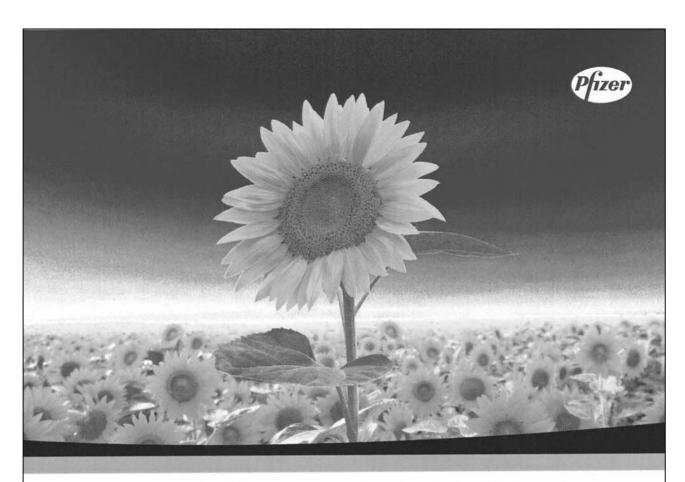
薬価基準収載

Zyprexa®、ジプレキサ®は Eli Lilly and Companyの登録商標です。

統合失調症に関する医療関係者向けサイト統合失調症に関する一般の方向けサイト www.zyprexa.jp www.schizophrenia.co.jp

製造販売元〈資料請求先〉

日本イーライリリー株式会社





選択的セロトニン再取り込み阻害剤 (SSRI) 薬価基準収載

JZOLOFT Tablets

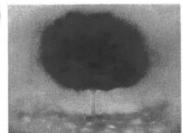
塩酸セルトラリン錠 劇薬 指定医薬品 処方せん医薬品 注意 – 医師等の処方せんにより使用すること







トリアゾラム錠 0.125mg錠·0.25mg錠 向精神藥、習慣性医薬品³¹⁾、指定医薬品、処方せん医薬品³²⁾ 注1)注意一習價性あり 注2)注意一医師等の処方せんにより使用すること



抗不安剤

0.4mg錠·0.8mg錠 アルブラゾラム錠 向精神薬、指定医薬品、処方せん医薬品部 注)注象-医師等の処方せんにより使用すること



抗うつ剤

トラゾドン塩酸塩錠 錠25.50 劇薬、指定医薬品、処方せん医薬品⁽¹⁾ 注)注意-医師等の処方せんにより使用すること

ファイザー株式会社 〒151-8589 東京都渋谷区代々本3-22-7 資料請求先:製品情報センター

効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等については添付文書をご参照ください。 2008年6月作成

新提展。第25 27日本一下第25



選択的セロトニン再取り込み阻害剤(SSRI)

薬価基準収載



指定医薬品・処方せん医薬品 *)

デプロメール 金定 50 75

DEPROMEL® TABLETS §

フルボキサミンマレイン酸塩/Fluvoxamine Maleate

注)注意-医師等の処方せんにより使用すること

効能・効果、用法・用量、禁忌、原則禁忌を 含む使用上の注意等については製品添付 文書をご参照ください。



製造販売元[資料請求先]

明治製菓株式会社

〒104-8002東京都中央区京橋2-4-16 http://www.meiji.co.jp/medical/

作成:2008.6



これまでも、これからも、「患者思考」

患者さんのことを、自分のことのように考えると、見えてくるものがあります。 いまだ満たされていない患者さんのニーズに応えるために何ができるか。何を優先すべきか。 私たちヤンセンファーマは、その最善の答えを導いていくため、

これからも挑戦を続けていきます。

ヤンセンファーマは、CNS(中枢神経系)、真菌症、鎮痛・麻酔、がん領域の リーディングカンパニーを目指す、 「ジョンソン・エンド・ジョンソン」グループの製薬会社です。

為 ヤンセン ファーマ株式会社

〒101-0065 東京都千代田区西神田 3-5-2 http://www.janssen.co.jp